

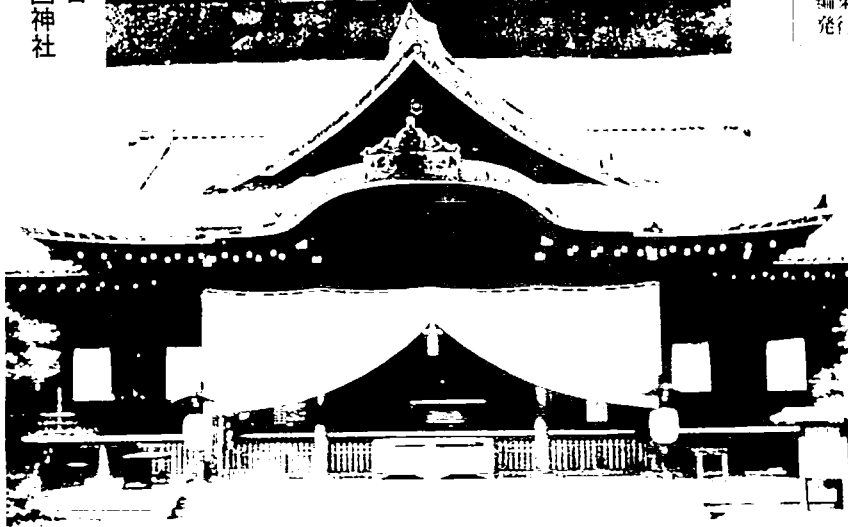
第23回特攻隊慰霊祭

報 特 攻
 平成14年5月
 会

第51号

〒105 0001 東京都港区
 虎ノ門3 6-8 第6森ビル
 財団法人 特攻隊戦没者
 慰霊平和祈念協会
 電話 03(3432)1090
 FAX 03(3432)5567
 編集人 田中 賢正
 発行人 木村 元

4月3日
 於靖国神社



目次

特攻隊合同慰霊祭 1
 沖繩巡拝特集 3
 13年度事業報告と会計報告 43

参列者は遺族米賃会員合せて約
 三〇〇名、盛会ではあったが殆んど
 年寄りで、このままではやがて
 消滅してしまうことを危惧する。



献 吟

噫特攻 吟 石橋 一歌ほか

詩 永野 秋則

風蕭蕭月半輪輝 太白山中天島鳥蒼
 運命定慈空決戦 敢然當敵艦動芳
 今日も亦 黒潮踊る海洋に
 飛び立ち行きし 友は帰らず
 紅顔痛未桜花蕾 今夕又翔求巨舳
 飛燕不帰無限思 英魂鎮此漲波光

祭文

謹んで特別攻撃隊殉国烈士の御霊に申し上げます。
本日、ここ靖国神社にて、第二十三回特別攻撃隊戦没者合同慰霊祭を執り行つにあたりまして、御遺族の方々をはじめ、多くの関係有志が集まりました。特別攻撃隊員として散華されました在天のご英霊に對して、心から敬弔の誠を捧げたいという気持ちには、私共全員に共通する切実な想いであります。

ご英霊は、特別攻撃作戦におきまして、戦局厳しい中、愛する家族との別離や、確実なる死をもって完遂される任務を従容として受け止め、若き命を祖国、日本の為に捧げられた尊き御霊であられます。

ご英霊が散華されてから、はやくも六十年近くが経とうとしております。特別攻撃隊が捧げられた尊き命を礎といたしまして、日本は現在、平和で繁栄した国となりました。今の日本の平和を鑑みるにつけても、ご英霊の崇高な任務と精神に對して、心からの敬意と、言葉では到底表現しつくせないほどの感謝の念を禁じ得ないのであります。

春うらかな本日、靖国の社には桜の花が見事に咲きましたその桜を観るにあたりまして「靖国の桜になつて会おう」と誓ひ合つて散華されました御霊のご遺志が、沸々と私の胸に去来してまいります。

特別攻撃隊のご英霊は「くれぐれも後の日本を頼む」というご自身の命を懸けた託しを残されて散華されました。その精神は、肉体としての尊い命が捧げられた後も、普遍かつ不滅のものとして存在し続けています。後に続く私共は、ご英霊の託しと對峙する時、そのご遺志を実現するための義務と責任に對して、謙虚で厳肅なる気持ちを感じ得ません。

現代日本に生きる私共は、特別攻撃隊の御霊に深く想いを馳せると共に、過去・現在・未来と連綿と続く祖国・日本の歴史において、より一層日本を立派な国にすべく精一杯努力し、精進を重ねてまいることと尊き御霊に誓う次第でございます。

特攻隊の歴史が日本に存在し、その事実が未来永劫語り継がれることによつて、ご英霊の魂は日本の精神として生き続けることでしょう。そして我々日本人は、その精神を尊重することと、ご英霊の尊き魂に相応しい国を実現してゆくという大きな命題を、実行に移してまいります。

ご英霊の崇高なる精神が、決して忘れ去られることのなきよう、我々は世代から世代へと特別攻撃隊の歴史をしっかりとつたえてまいります。そして立派な国、日本を実現させることで、ご英霊の捧げられた若き命に恥えてまいります。

どうか、ご英霊がやすらかであられますよう、そして混乱した歴史観を持つ戦後日本社会での長い呪縛と苦しみから一時(いつとき)も早く解放され、御霊の癒されんことを願つてやみません。

我々、本日ここに集いました関係者一同、ご英霊の精神を語り継ぎ、実現していくにあたりまして、日々努力してまいる所存であります。そしていつ何時(なんどき)もご英霊の御霊のやすらかならんとを、心よりお祈り申し上げております。

本日の合同慰霊祭にあたりまして、ここに御霊のご功績をたたえ、深く感謝いたしますと共に、謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

平成十四年四月三日

財団法人 特攻隊戦没者慰霊平和祈念協会

会長 瀬 島 龍 三

羽 檄

桜花は散際を愛づ 靖国の桜眺むる人士 特攻烈士の散華を憶ふ者幾許かある 志士逝きて半世紀余 世は泰平を謳歌し 衆生花見酒に酔ふ 梟敵神州に迫るや 敢然起つて醜虜に衝りしをのこ此所に神鎮まるに

思ふに欣然として死地に赴きしは 後に続く者あるを信ずればなり 然るに何んぞ 精神の荒廃今やその極に在りて 新聞紙を拡ぐれば 金権万能の弊風 滔々として世を覆ひ 鮑魚の臭見るに堪へず 特攻烈士の精神弊履と化す 神前に低頭し我等何んと応へんや

仄聞す 国政の衝に在る者 戦没者を祀る場を別に設けんとすと 祭事を怠りて 政事の存するなし 民族存立の根底を靖国に置かずして いかで杜稷を全ふするを得んや

特攻烈士と身近にありし我等既に類齢 往時の客氣失ふに至りしも 此所神前に額突けば 吾人に告ぐる神託を覚ゆ 吾儕白髪を染め 棹尾の勇を振ひ 特攻精神を世に顕彰せん

平成壬午卯月

蛇足

支那の古代檄(ふれぶみ)で重要なものや急ぐものには鳥の羽をつけた、よつて羽檄という。

鮑魚とは干魚のこと、悪臭の譬え。

沖縄巡拝の手引

沖縄慰霊巡拝旅行・

計画が確定しました

今回の慰霊旅行のスケジュールが確定し、参加者に連絡が行われました。その詳細については以下のとおり。

○5月21日(火)

09時15分 羽田空港発全日空83便にて沖縄へ出発

11時45分 那覇空港着

12時00分～45分 昼食 伊集の花

13時10分～14時30分 自衛隊訪問

14時30分 各所巡拝護国神社

読谷飛行場跡 読谷飛行場跡

17時00分 ホテル着 宿泊

○5月22日(水)

10時00分 貸し切りバスにて移動開始

万座毛、金武町鎮魂碑

東南植物園、中城湾

首里城、守礼ノ門

17時00分 ホテル着 宿泊

○5月23日(木)

09時15分 ホテル発

10時10分 泊港発(渡嘉敷村宮船)

洋上にて慰霊祭

11時10分

渡嘉敷港着

白玉之塔他島内巡行(マリンビレッジ所有のバス

2台による)

16時00分 渡嘉敷港発

17時10分 泊港帰着 ホテルへ

18時30分 「那覇」にて夕食懇親会

○5月24日(金) バスにて戦跡巡り

09時00分 出発 白梅の塔、健児の塔

平和記念公園他

15時00分 那覇空港にて搭乗手続き

16時15分 那覇発全日空90便にて羽田へ

18時35分 羽田空港到着、ロビーにて解散式

以上ですが、参加者は37名となっております。費用は約一人10万円(2、3名一室利用)、沖縄ツーリスト(株)のお世話で行って参ります。なお旅行記については次号(52号)に掲載の予定です。

です。

なお一部の方は参拝終了後、宮古島へ足を伸ばされます。また23日(木)に帰られる方もおられます。

特筆したいのはアメリカ在住のご婦人(アメリカ人と結婚された方)が沖縄で合流し、巡拝行事に参加されることです。近年国内は勿論、国外にまで特攻隊の事蹟が知られるようになりました。これを機に当協会も広報活動を強力に展開したいものと考えております。

今回の行事に現地の方々のご協力を頂いておりますが、ご紹介いたします。

○知念朝睦氏(海上挺進第3戦隊、陸軍少尉)

○加地順人氏(沖縄県護国神社神職)

○小嶺安雄氏(渡嘉敷村々長)

○松本好勝氏(渡嘉敷村助役)

○米満二佐(自衛隊沖縄地方連絡部(事務局 木村))

沖縄巡拝特集

全般

沖縄戦全般の経過.....4

各県等の碑.....9

軍司令官の最後.....10

航空

航空作戦の概要.....11

陸軍航空機投入数.....15

空軍之塔.....15

沖縄に散った特操一期の戦友.....16

北中飛行場にまつわる話.....27

カラー頁

空挺特攻.....21

陸軍航空特攻.....22

海軍航空特攻.....23

水上特攻・水中特攻.....24

空挺特攻

義烈空挺隊概説.....30

義烈碑建立の由来.....33

水上特攻

震洋.....37

.....38

水中特攻

回天.....42



沖繩戦全般の経過

全般の経過を認識する為には、服部卓四郎著「大東亜戦争全史」の核当部分を転記する。

本島の地上戦闘開始

米軍の本島上陸

慶良間列島の攻略に成功した米軍は、四月一日大型舟艇一五〇隻、小形舟艇六〇隻を以て、北、中飛行場正面端手、納海岸に上陸を開始した。沖合には数百隻の米艦船が海面を圧した。この地区に配備せられていた臨時編成の前進部隊は潰走し、米軍は夕刻早くも北、中飛行場を占拠してしまつた。この報は大本営並びに陸海軍航空部隊に大いなる衝撃を与えた。

註 戦後の米側資料によると沖繩作戦に参加せる米軍艦船は一四五七隻（内輸送船四三〇隻）に上つていた。上陸せる陸軍並びに海兵部隊の総兵力は一八万三千名を教えた。

四月三日には、その第一線は第三十二軍の主陣地の前線、普天間東西の線に進出し、本島の中部地区は米軍が完全に占領するところとなつた。

第八飛行師団は四月一日より三日に

亘り特攻機四〇機、爆撃機一九機、誘導機二〇機を使用し、嘉手納沖敵艦船に対し、果敢なる攻撃を加え、撃沈破二十数隻の戦果を報じたが、大勢を左右するに至らなかつた。

第三十二出撃に決す

第三十二軍は、第十方面軍司令官の「第三十二軍は北、中飛行場に向い攻撃すべし攻撃開始は四月八日とす」との電命により、その持久戦略方針を捨て、四月八日を期し総攻撃を実施し、北、中飛行場を奪回することとなり、四月六日午後二時、これに関する命令を下達した。この決心は第三十二軍の持久戦略方針と相反するもので、上司の要求で已むを得ず採られたものである。

註 戦後の米軍資料によると米軍は上陸第六日迄に、戦闘機約二百機を北、中両飛行場に進出せしめた。

航空総攻撃と

第三十二軍の戦闘

菊水一号作戦

聯合艦隊は、米軍が北、中飛行場の使用を開始するに先だち、米軍に大損害を与え、戦勢を有利に展開する必要を認め、四月五日第三十二軍の地上総反攻と相呼応して航空総攻撃を実施す

ることとなつた。この作戦を「菊水一号」と命名した。

聯合艦隊司令長官は更に残存海上部隊の主力——第二艦隊（戦艦大和、巡洋艦矢矧及び駆逐艦八隻）を以て海上特攻隊を編成し、沖繩米軍泊地に突入せしむる決意を固めた。四月六日、本島周辺海域の敵艦船は戦艦九、巡洋艦一五、駆逐艦三三、輸送船六四、その他五八隻を数えた。

菊水一号作戦は四月六日、七日の両日に亘り決行せられた。台湾の第一航空艦隊、第八飛行師団もこの総攻撃に呼応する攻撃を決行し、六九九機がこの総攻撃に参加した。そのうち、特攻機は三五五機に達した。この攻撃は奇襲に成功し、大成功が報せられた。撃沈戦艦二隻、巡洋艦三隻、駆逐艦八隻、輸送船二隻、掃海艇三隻、その他二七隻のほか、撃破六一の戦果を数え挙げた。

海上特攻隊の悲劇——帝國艦隊葬送曲

海上特攻隊は四月六日夕、伊藤整一中将統率の下、内海を発航し、豊後水道を南下して四月七日朝、大隅海峡を西進したが、不幸にして豊後水道において敵潜水艦に、次いで米軍哨戒機マールチン一機に発見せらるるところとなつた。我が特攻隊は基地航空部隊の掩護もなく、一機の搭載機も持たず、猛牛

の如く沖繩の敵泊地に突進を続けたが、午後零時四十分と午後一時二十三分の二次の亘り米艦載機約三〇〇機の攻撃を受け、戦艦大和を始め主力が沈没した。不沈を誇る六四、〇〇〇噸の戦艦大和が沈没したのは、正に午後二時二十三分であつた。巨艦大和は激闘二時間余、魚雷一〇本、大型爆弾五箇、小型爆弾多数を被り、遂に九州西南方沖約五〇哩の海底に没し去り、伊藤中将以下約三千の将兵は艦とその運命を共にした。こゝに伝統を誇つた帝國海軍の海上勢力は文字通り潰え去つたのである。

第三十二軍の総攻撃決行寸前に中止第三十二軍は第六十二、第二十四師団、独立混成第四十四旅団、海軍陸戦隊を四線に重畳展開して、総攻撃を準備しつゝあつたところ、偶々四月七日午後三時頃、米船団一一〇隻が新たに牧港沖合に出現したので、側背に対する敵の上陸を憂慮し、かねて持久戦略を最も強く固執しつゝあつた八原作戦主任參謀の意見具申により、決行の寸前に総攻撃は中止せられた。かくて最も重要な地上総反攻の戦機は失われてしまつた。後に至つて第三十二軍のこの決心の変更を知つた大本営及び陸海航空部隊は痛嘆したが、如何ともなし得なかつた。

米上陸部隊総指揮官バックナー陸軍中将は海兵第三軍団を以て、国頭地区を掃蕩せしめつゝ、第二十四軍団を以て第三十二軍主力の陣地に近迫し、着々攻撃準備を進めつゝあった。

菊水二乃至五号作戦——地上漸く攻勢上総反攻決行とを信じ、米軍動揺の兆ありと確信する聯合艦隊は、四月九日引続き総攻撃を継続し、米艦船を全滅せしむべく、次の如き要旨の壮烈なる電命令を発令した。

- 一、諸情報を経合するに敵は動揺の兆ありて、戦機は將に七分三分の兼合にあり
- 二、聯合艦隊は此の機に乗じ、指揮下一切の航空戦力を投入総追撃を以て飽く迄天号作戦を完遂せんとす

第二次総攻撃は四月十日の予定であったが、四月十二、十三日に決行された。この攻撃には三九二機（内特攻二〇二機）が使用せられ、戦果は各種艦船四七隻の撃沈を報じた。沖繩進攻米軍の損害甚大なりとの外電報道は、大本宮海軍部や聯合艦隊首脳の決戦思想を掻き立て、言論は一斉に沖繩決戦を高唱し、国民の間にも戦勢挽回を本作戦に期待する気運が愈々昂まつて来た。

又大本宮の意図をうけた第十方面軍

からは第三十二軍に対し、北、中飛行場の奪回を要望する激しい電報が相次いだ。第三十二軍司令官は前述第十方面軍司令官の意を体し漸く再び攻勢を決意し、十二日夕から攻勢を開始した。しかし部署と決意の不徹底も禍し、却つて莫大なる損害を蒙つて中止した。

陸海軍挙げての航空総攻撃は第三次（四月十六日）第四次（四月二十一日、二十二日）第五次（五月四日）と相次いで続行された。そして総攻撃の合間にも連日不断の小規模攻撃が執拗に実施された。四月六日から五月四日の間に使用せられた飛行機の総延機数は一、七一一機の特攻機を含む五、〇六八機に及び、そのうち一、六一一機が失われた。戦果は米艦船の撃沈一六一隻、撃破一四一隻と報じられた。

註 米軍の資料によると米艦船の沈没はこの間一七隻内外に過ぎなかったが、多数の艦船が損傷を受け、大なる脅威と苦痛を蒙つたもの如く、次の資料でもこれを窺知し得る。

- 1 昭和二十年四月十七日、第五艦隊司令長官スプルーアンス大將が、太平洋艦隊司令長官ニミッツ元帥に対し具申せる意見
- 敵の特攻攻撃の手段と効果、それによつて受ける我が艦隊の喪

失と損傷は、これ以上の攻撃を喰止める為、とり得るあらゆる方法をとらなければならぬ段階に到達した。使用し得るすべての飛行機で九州及び台湾の飛行場を攻撃することを進言する。

2 沖繩作戦に従事したニューヨーク・タイムス紙の軍事記者ハンソン・ボールドウインの記述

敵機の攻撃は昼も夜も絶えたことがない。慶良間の錨地は損傷艦で埋めつくされ、太平洋到る所跋を更く艦船の列が東へ東へと進むのが見られた。

陸海軍作戦構想の相違

海軍は本作戦の成功を愈々確信し、沖繩奪回をも志すようになると共に、天号作戦に対する陸軍の熱意に不満を感じ初めた。四月二十一日、聯合艦隊が指令した次の作戦方針がこの間の消息を物語っている。

聯合艦隊は愈々航空作戦を強力に遂行し、好機沖繩に逆上陸を遂行して戦局を打開す之が為

- 一、第三、第十航空艦隊より極力航空戦力を抽出し、第五航空艦隊の戦力を強化し、全航空兵力を挙げて天号航空作戦を強行す
- 二、陸軍に対し第六航空軍に対する戦力補充を督促し、第六航空軍を

鞭撻して天号作戦に一途邁進せしむ

三、台湾の第一航空艦隊、第八飛行師団の作戦協力を強化する如く措置す

海軍が沖繩決戦に熱中している一方、陸軍は後述する如く四月上旬以来本上陸戦の本格的準備に懸命の努力を傾注しつゝあった。勿論第六航空軍を聯合艦隊の指揮下に入れ、可動航空戦力をこれに注入したが、当時日毎に激化するB29の本土空襲に対処するため、防空兵力までも天号航空作戦に投入することは出来なかつた。蓋し本土の防空を担任している陸軍としては戦争完遂上防空を重視せざるを得なかつた。海軍側では陸軍が本土決戦を重視するの余り、天号航空作戦に対する航空戦力の出し惜しみをしているのでは無いかという疑念さえ持った。

元來陸軍の沖繩作戦に対する考え方は、本土決戦準備のため出血、持久作戦を行うにあつた。本土に約六〇箇師団の戦力を準備しつゝある陸軍としては増援の方途も無く、二箇師団有るの兵力しか存在していない離島沖繩において決戦を遂行する構想はもともと持ち得ないところであつた。一方海軍は既に海上部隊全滅し、残存の航空部隊が唯一の戦力である。加うるに航空作

戦の戦果を過信しつゝある海軍としては、海軍戦略の特性と相俟つて沖繩決戦を願望するのほまた故あることであつた。

第三十二軍の敢闘

航空部隊が沖繩決戦に必死の願望と努力とを賭け、又戦果を過信しつゝある間、沖繩の戦況はその判断に反して悪化しつゝあつた。

米第二十四軍団は四月十九日以来、先ず西海岸に沿う正面において総攻撃を開始した。聯合艦隊の米艦船大量撃沈破の報告に拘らず、沖繩方面の米艦船は減勢を見せず、全島を圍繞して戦史空前の艦砲射撃を第三十二軍の頭上に浴びせていた。第三十二軍は海岸正面の主陣地を逐次蚕食せられ、四月二十二日、三日頃には、第六十二師団は連日の死闘により戦線の保持漸く危殆に當面しつゝあつた。第三十二軍は、南方にあった独立混成第四十四旅団を第一線に増強するの余儀なきに至つた。

当面の米軍は、第二十四軍団の三箇師団と国頭方面のある海兵第三軍団の二箇師団のほか、更に中間地区に一乃至二箇師団を控置しているものと判断せられた。天号航空作戦の大目的たる敵の上陸軍の洋上撃破には完全に失敗し、第三十二軍は無疵のまゝ、上陸せる敵六乃至七箇師団を邀えたのである。

今や第三十二軍は五、六倍の米地上軍の攻撃と全島を覆う米艦砲射撃の中に孤立し、寸土を争う死闘を遂行しなければならぬ境地に立っていたが、四月下旬、第三十二軍の陣地は左翼から崩壊し始めた。

最後の地上攻撃——決行厳命

第三十二軍の消極的態度は大本営や海軍及び航空部隊の焦慮と不満とを一層深刻にした。大本営のこの意図を享けて第十方面軍司令官は、第三十二軍司令官に対して再び攻勢決行の厳命を下した。

四月二十九日、第三十二軍は最後の攻勢を決意し命令を下達した。攻勢決行は五月四日と予定され、第三十二軍の全兵力の使用が計画された。五月四日、第三十二軍の最後の攻勢は予定の如く決行された。しかし戦況の把握が不十分であつた上米軍の砲爆撃に遮ぎられ、五月五日、第三十二軍は攻勢失敗せるものと認めこれを中止し再び陣地に拠る持久抵抗に復帰した。

この攻撃により、第二十四師団はその戦力の三分の二を損耗した。その他の部隊も甚大なる損害を蒙つた。貴重なる弾薬を多数消費し、爾後一門、一日、一〇発に制限しなければならぬ状態に立ち至つた。最後の攻勢失敗は首里戦線崩壊の端緒となり、沖繩の戦況

は俄然悪化する契機となつた。このような戦況の決定的悪化に拘らず、海軍の沖繩奪回の願望と熱意は益々強いものがあつた。

かくて陸海軍間における作戦構想の相違は五月上旬、第三十二軍の攻勢失敗、戦況の急速悪化に伴い愈々顕著になつて来た。即ち陸軍においては逐次天号作戦の前途に見切りをつけ、本上決戦準備に徹底せんとする傾向を示したのに対し、海軍は依然天号航空決戦の続行の熱意を堅持したことであつた。

天号作戦の続行

米軍の反撃——沖繩基地活動

我が航空特攻に悩まされた敵軍は五月に入るや俄然活潑なる空軍の反撃を開始した。その一つは、B 29と機動部隊の九州航空基地に対する攻撃であつた。B 29の攻撃は数回反復せられ、その延機数は約三〇〇機に達した。又艦載機の攻撃は五月中旬、二回に亘り九州の基地に対して行われた。その延機数は約一、六五〇機に及んだ。他の一つは、四月下旬以来使用を開始した沖繩基地米戦闘機の我が特攻機に対する遊撃作戦であつた。前者は我が空軍の活動を相当制扼したが、掩護施設が徹底していたので飛行機の直接被害は

比較的少かつた。後者は米軍の優秀なレーダー装備及び暗号解読能力と相俟つて、我が特攻作戦に致命的な打撃を加えた。もともと特攻機は多数の改修練習機を含み、機材は不備で、操縦士は烈々たる殉国の精神には燃えていたが、遺憾ながら練度が低く、しかも航路は南西諸島沿いに限られ、攻撃海域は限定されていたため、準備万全なる敵機の遊撃に遇うこととなつた。

その上米軍は既に沖繩基地が使用し得るようになったためにその空母艦隊は、我が航空特攻攻撃の威力圏外に位置し、新たに進出せる基地航空部隊と共に我が特攻機に対する脅威を倍加した。本島の北、中飛行場を過早に米軍の手中に与えたことはこのように我が天号航空作戦を困難ならしめた。航空総攻撃は回を追う毎に損耗が増大し、戦果が減少して来た。

菊水六乃至八号作戦

五月十一日、第六回目の航空総攻撃が行われた。二一七機（内特攻機一〇四機）を使用し、一〇九機を失つたが、戦果は輸送船一隻、不詳七隻の撃沈破が報告せられたのみであつた。第七、第八回の総攻撃は五月二十四、五日及び五月二十七、八日に遂行せられた。計七三七機（内特攻機二〇八機）を使用し、一六八機を失つたが、戦果報告

は撃沈一〇隻、撃破八隻に止まった。

義号作戦——義烈空挺隊のなぐり込み

かくの如く沖繩基地米空軍の反撃は逐日強化せられ、我が特攻機の損害と戦果の比は愈々悪化してきた。こゝにおいて大本営は沖繩米基地に決死の挺進隊を使用し、一時基地の使用を不可能に陥れ、その好機に航空総攻撃を決定せんことを企図した。この計画は五月中旬実行する予定であったが、五月二十四日夜に至って決行された。この挺進隊を義烈空挺隊と名づけ、この作戦を義号作戦と呼んだ。

その編成は奥山道郎大尉の指揮する陸軍挺進隊一三六名(五箇小隊と指揮班に分る)から成り、爆撃機一二機に分乗し、破壊用の軽兵器を以て装備せられた。作戦の方法は北、中飛行場に夜間強行着陸を実施し、米軍の飛行機、飛行場施設等を破壊し、基地の使用を一時不能に陥らしめる、所謂「なぐり込み戦法」であった。

五月二十四日夜愈々この作戦を決行したが、聯合艦隊は計画に反し、二十四日の午後米軍機動部隊を発見し、この攻撃に戦力を使用したため、第六航空軍が独力本作戦及びこの機を利用する特攻攻撃を行うこととなった。挺進隊中、四機は不時着又は反転し、八機が北及び中飛行場に着陸し、五月二十

七日まで奮闘を続け、五月二十五日は完全に敵基地を制圧し得た。しかるに五月二十五日、二十六日は天候不良のため、特攻攻撃を遂行することを得ず、あたら義烈空挺隊の戦果を利用するこゝとが出来なかつた。

陸軍、天号作戦を見限る
陸軍は上述のような作戦推移の景況と、既に予定した可動航空戦力の大部を投入した現況に鑑み、五月下旬天号航空作戦の前途に見切りをつけた。

五月下旬聯合艦隊司令長官豊田大將は軍令部総長に転任し、小沢中将がその後を襲った。たまたま小沢中将は聯合艦隊の指揮下にある陸軍の第六航空軍司令官菅原中将より新参であったので、五月二十六日、第六航空軍は聯合艦隊の指揮下から脱し、航空総軍司令官の指揮下に復帰せしめられた。

大本営陸軍部は五月二十六日の命令を以て航空総軍司令官に対して九州及び朝鮮海峡方面を重点とする本上航空作戦準備を命じ、一部を以て米軍の沖繩基地制圧の作戦を実施すべきを附加した。かくして陸軍は天号作戦を打ち切り、決号作戦に移行することとなった。

海軍、天号作戦を続行す
海軍は、依然天号作戦の継続に熱意を持ち続けていた。六月一日軍令部の情報判断においても天号航空作戦の戦

果を相当確信していた。即ちこの判断

において「敵海上兵力に多大の損耗(撃沈大破は航母一〇乃至一一隻、護衛空母一三乃至一四隻、戦艦五隻、巡洋艦二九隻、駆逐艦九二隻、輸送船七五隻、掃海艇三三隻、不詳艇一〇二隻、中小破は二一一隻)を与え米機動部隊の飛躍的進攻を不可能ならしめた」と述べ、更に我が採るべき方策として

「沖繩周辺敵艦船及敵航空基地に対する航空作戦を積極的に続行し、敵艦船の漸減並増援補給遮断を計ると共に、基地の整備並に基地航空兵力の増勢を阻止す……戦況有利に展開し、沖繩周辺敵艦船を撃破した場合は機を失せず総力を結集して航空撃滅戦に移転し、これと併行して沖繩方面増援作戦を行ひ得る如く準備す」と謳った。なお決号作戦準備は天号航空作戦に支障なき範囲において、先ず四国、南九州に重点をおいて実施することを明らかにした。これによって陸海両軍の航空作戦指導の方針が愈々対蹠的となった。但し前記方策の内容が示す如く海軍の天号作戦は、このころ決戦思想から漸次出血持久作戦に変わって来た。

地上軍喜屋武の複郭陣地に退却
これより先、第三十二軍は敵の重圧を支え難く、五月十四日、百里を捨ててその後方に戦線を収縮した。五月二

十日頃における全軍の戦力は三万名内に減少し、火砲六〇%、機関銃三〇%に減少し、敵の攻撃は愈々急を加えた。

第三十二軍は敵の圧迫に抗し切れず、五月二十九日から沖繩本島南端喜屋武半島の複郭陣地に向い最後の退却を開始し、その運命も一、二句の裡に尽くべき戦況に当面した。

沖繩の失陥

最後の総攻撃と第三十二軍の全滅
六月上旬及び下旬の二回に亘り航空総攻撃が敢行された。この面総攻撃において延五〇二機(内特攻機一〇四機)が使用せられ一三機が失われた。戦果の報告は僅かに七乃至八隻に過ぎなかつた。

第三十二軍は、六月三日頃概ね順調に複郭陣地の新配備につき、六月十一日から複郭陣地における最後の死闘に入った。十七日頃戦況は絶望的段階に入り、最早組織ある戦闘も行われなくなった。十九日、軍司令官は各方面に決別を打電した。喜屋武半島複郭陣地における第三十二軍の抵抗も六月二十二日、遂に終焉となった。

牛島軍司令官、長參謀長の切腹
軍司令官牛島満中将は參謀長長勇中

将と共に六月二十三日午前四時三十分、海岸に面する坑道陣地の人口において次の辞世の歌を詠じつゝ、日本古武士の礼式に則つて切腹して果てた。

秋をまたで 枯れゆく島の青草は

皇國の春に 蘇へらなむ

矢弾つき 天地染めて散るとても

魂かへり魂かへりつゝ、皇國までも

小祿地区における太田少将の指揮する海軍地上部隊もまた、六月十三、十四日全部隊突撃を敢行し、太田実少将及びその幕僚は十三日午前一時從容自決を遂げた。

敵が沖繩本島上陸以来、正に八十三日に亘る死闘の連続であった。かくて沖繩は完全に敵の手中に帰し、該基地の米空軍は西日本一帯を制圧することとなり、又敵本土進軍の大基地と化した。

六月二十五日、大本営は沖繩作戦の終焉を公表した。

本作戦の異色と彼我の損害

この作戦の異色は、史上空前の大航空特攻作戦の遂行と国民の戦闘参加であった。数千の若人が祖国の難に赴き、一機克く一艦を屠るべく装備不十分な改修練習機までも駆つて、防空砲火の火ぶすまと敵機の邀撃網を衝いて、敢然として敵艦船に突入していった。又十七歳より四十五歳までの男子を始

め、可憐なる男女中学生に至るまで義勇隊を組織し、戦闘、通信、衛生、後方等の各種勤務に参加し、文字通り軍民一丸となつて闘つた。数万の老幼婦女子もまたこの死闘の渦中に巻き込まれて、将兵と運命を偕にしたのであつた。

本作戦における日本軍は島民義勇兵を含めて約九万名が玉砕し、更に島民非戦闘員の犠牲は実に一五万に上つた。軍の生存者は七千八百余名を数えたがその一半は負傷者であり、他の一半の多くは沖繩作戦終焉後、なお坑道陣地に立籠つて抗戦を継続し、その中にはこの年の秋に及んだものがあつた。一方米軍の損害もまた四万九千名(内戦死一万一千四百名)に達し、米軍司令官バックナー中将も六月十八日午後、陣頭指揮に斃れた。

米艦船攻撃のため使用せられた日本軍飛行機の延機数は、特攻機二、三九三(内陸軍機九五四)機を含め七、八五二(内陸軍機二、二二〇)機を数えた。敵艦船の撃沈破は約四〇四隻と報

ぜられた。本作戦間における航空攻撃の実施の経過は別表の通りであつた。戦果誤判の戦訓と沖繩作戦の意義
因みに戦後の資料により米軍艦船の損害は沈没三六隻、損傷三三八隻なことが明かになつた。但し米航空母艦、戦艦、巡洋艦の撃沈は一隻もなかつた。

このように戦果を過大に誤判する原因として当時考察せられたのは次の如き諸点であつた。

一、生還しない航空特攻作戦の特性上、戦果確認が困難である

戦果確認も敵航空勢力の優勢に遮ぎられる

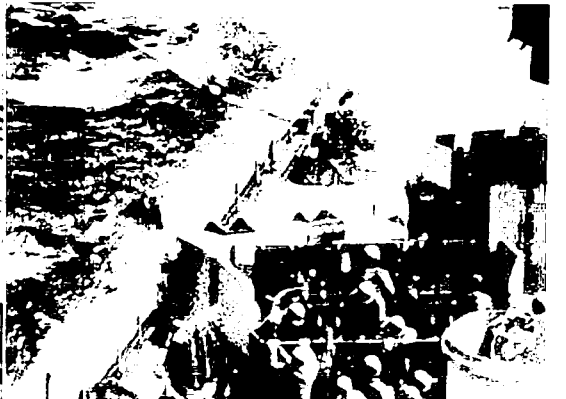
二、水柱、火柱等に眩惑せられて視察を誤る 殊に多くの場合薄暮、夜間攻撃なる為一層誤認し易い

三、同一の戦果を参加各部隊から二重、三重に報告され易い

四、将兵の戦場共通心理から戦果(含艦種)を誇大に報告し易い

なお空母、戦艦、巡洋艦等の撃沈実戦効果が無かつたのは、練習機改造の特攻機を以て大型艦への突入又は致命的効果を収めることが困難なることを物語るものであろう。かくの如き戦果の誤判が台湾沖海戦以来、作戦指導を誤り、作戦の成否に影響するところが大きかつた。台風期直前に亘る沖繩作戦三ヶ月の故障は以上の如き数的戦果を越える重要な作戦目的を達成した。即ちこれにより獲得した貴重な時間は本土決戦の準備に寄与したばかりでなく、沖繩作戦で示した軍民の敢闘は、敵をして本土攻撃を一段と慎重ならしめた。

戦果誤判の戦訓と沖繩作戦の意義
因みに戦後の資料により米軍艦船の損害は沈没三六隻、損傷三三八隻なことが明かになつた。但し米航空母艦、戦艦、巡洋艦の撃沈は一隻もなかつた。



沖繩にある各県等の塔

沖繩には全国各府県等の碑がある。ここにその碑銘と所在地を一表に纏めてみるが、大半は摩文仁台上にあるのでそれは印をもって示す。

北海道 糸満市字米須

「北霊碑」

青森県 ※

「みちのくの塔」

秋田県 ※

「千秋の塔」

岩手県 ※

「岩手の塔」

山形県 糸満市宇真栄里

「山形の塔」

宮城県 ※

「宮城之塔」

福島県 ※

「ふくしまの塔」

茨城県 ※

「茨城の塔」

栃木県 ※

「栃木の塔」

群馬県 ※

「群馬之塔」

千葉県 ※

「房総之塔」

埼玉県 ※

「埼玉の塔」

東京都 糸満市字米須

「東京之塔」

神奈川県 ※

「神奈川の塔」

新潟県 ※

「新潟の塔」

長野県 ※

「信濃の塔」

富山県 ※

「立山の塔」

石川県 ※

「黒百合の塔」

山梨県 具志頭村字具志頭

「甲斐之塔」

静岡県 ※

「静岡の塔」

愛知県 浦添市仲間

「愛国知祖之塔」

三重県 ※

「三重の塔」

岐阜県 ※

「岐阜県の塔」

福井県 ※

「福井之塔」

滋賀県 ※

「近江の塔」

京都府 宜野湾市字嘉敷

「京都の塔」

大阪府 ※

「なにわの塔」

兵庫県 ※

「のじぎくの塔」

奈良県 糸満市字米須

「大和の塔」

和歌山県 糸満市字米須

「紀之国之塔」

鳥取県 糸満市字米須

「因伯の塔」

島根県 糸満市字米須

「島根の塔」

岡山県 ※

「岡山の塔」

広島県 糸満市字米須

「ひろしまの塔」

山口県 ※

「防長英霊の塔」

徳島県 ※

「徳島の塔」

香川県 糸満市字米須

「讃岐の奉公塔」

愛媛県 ※

「愛媛之塔」

高知県 ※

「土佐之塔」

福岡県 ※

「福岡の慰霊の塔」

佐賀県 ※

「はがくれの塔」

長崎県 ※

「鎮魂長崎の塔」

大分県 糸満市字米須

「大分の塔」

熊本県 ※

「火乃国之塔」

宮崎県 糸満市字米須

「ひむかいの塔」

鹿児島県 ※

「安らかに」

沖繩県護国神社

那覇市奥武山

ある資料に載っている全県下の慰霊碑を数えてみると、三六六基という数字となった。その大半は各地域で戦火に焼けた住民の慰霊碑である。国内戦の実相を窺い知ることができる。住民の戦死者は約一〇万人に達した。県外出身者、というのは軍人であるが、その戦死者は約六万五千人で、都道府県の慰霊碑はその人達を対象にして建てられたものであり、司令部や部隊の慰霊碑も二十数基数えることができる。

摩文仁台上の軍司令部壕を見て往時を偲ぶよすが

西野弘二著「紅焰」より

第32軍参謀部付西野少佐は、長参謀長から遊撃戦の指導の爲司令部壕を脱出することを命ぜられたのは、6月18日だった。木村、三宅、葉丸、長野の各参謀はこの晩住民の服装で司令部壕を出たが、八原参謀以下数名はなお残っていた。そして軍司令官等自決後脱出し、困頭に向ったが、途中で捕えられ最後の場面の生証人となった。以下西野少佐手記のその場面、

二四・〇〇（6月22日）は来た。しかし山頂は未だ奪回出来ぬ。司令官は何時ものように起きておられる。隣り合わせの参謀長はいびきをかいて寝て居られる。総員斬込みは〇五・〇〇に延ばされた。時は容赦なく刻まれて行く。〇四・〇〇になった。山頂はついに奪回出来ないか、斬込み準備が命ぜられた。司令官、参謀長も準備を終えられた。いよいよ出撃だ。

将校たちは軍司令官の居室の前に集まり、お別れの盃を頂いた。御盃に恩賜の御酒は次々に注がれ、一人一人を巡って行った。皆々に交わされる言葉

は、顔つきは、一寸そこに旅にでも出掛けるように気軽なものだ。しかし人々の眼光は射る程に鋭い。そして人生最後の言葉は衷心より出で、且つ真理を穿つ。

「お世話になりました」

「お供をさせて頂きます」

最後の言葉は交わされている。横には今朝戦死した戦友が三十名ばかり、蠟で作った凄惨さを物語る彫刻のように、語らざる屍として倒れている。

ただよう死臭、ともされた香の香り、ほのかに香煙がこもっている洞の中に、あやしげなローソクの灯は一際明るく燃え立っている。この洞穴はもはや、うつつの世とは思われぬ。喜びや笑い、は失われてしまっている。死というどん底に追い込まれて、武夫はその鉄のような武士の節操を守っていた。死を超克せんとする人々の努力の光の結果が、今燦然と洞穴の天上の一角より照らされている。

摩文仁山は白々と明け染めかけた。

時は今だ。

海岸側の出口から斬込み隊は躍り出した。神々の出発だ。嗚呼、帰らぬ神。

副官の持つローソクの灯を先頭に、淡々たる軍司令官、豪傑魁偉の参謀長と統かれる。参謀長は上衣を脱いだままだ。白いワイシャツの背には「義勇奉公

忠則尽命」陸軍中将長男と血書されている。両將軍は海岸側、壕の出口付近の断崖の上に介錯役の副官、剣道五段の坂口大尉が付添い、台上に静座された。遙か東天を拝する將軍達の頭上には、かすかに紅を含んだ飛雲が流れ走る。朝霧が谷より萌え上がった。残月には今だ天空を支配するかのようには暁天にかかっている。

自刃だ。手元を定めた副官の振りあげた手練の白刃は、神業のように宙を切って將軍の頭をはねた。旭日が倒れた將軍達を静かに照らし始めた。武士の掟を守り、敗れた戦に責めのかかしをたてられた。

ひと時を過ぎた。静かな壕の中で突如、拳銃、手榴弾の爆発音が闇をついた。將軍を葬った四人の副官達は軍装に身を固め、拳銃で相い向かったまま、その他の人達は手榴弾や拳銃で自決し果てた。鮮血は床に流れ、脾肉はとび散る。その中には娘たちも混じっている。娘達はお互いに抱擁したままどうつ伏し、最期を遂げた。

百米位の洞の間には惨烈な最期を遂げた人々、五、六十の遺体が転げ重なり、凄惨の極みである。乳石には飛び散った肉が、鮮血がこびりついてぎらぎらしている。総ての屍、総ての物、置いたままの飯盒、剣、銃、小机、屍の中

に散乱した寝台、万物は総て動く力を失った。意志を失い生の躍動を失った。独りとり残された、ともされたままのローソクの光が、直立して妖魔の世界を照らしつけている。光が時折ぐらりと揺れる。溶けた蠟が、ローソクをつたわって思い出したように床に流れる。宛も生あるかの如くに。

悲劇は終わった。そして総ては終わった。洞は死の世界を以て閉じられた。

沖繩本島作戦は六月二十三日、悲劇を以て事実上の終息を告げた。

この外の壕の者達も逐次玉砕して行った。沖繩に軍命を奉じ、或收の掃蕩自らと最後の結末を如何にすべきやと將軍達は念じていたのである。その深き絶望のどん底に信賴すべき上官を失い、狂乱の如くその指揮官にとりすがり右往徘徊し、怒泣の後、遂に死を選んだ人もいた。或る傷者は熱狂的に、「俺は死ぬぞ、俺は死ぬぞ」と怒号し傷つける足をひきずり、戦死者の近くに來て手榴弾の安全栓を引き、その爆裂と共に血塗れになって死んだ。偉大なる死への引具である。

沖繩方面航空作戦の概要

——陸上自衛隊幹部学校編

「沖繩作戦」の該当箇所抜粋

沖繩戦開始前の行動

九州沖航空戦

天号航空作戦は絶対の必要に迫られて策定されたが、その準備の完整にはなおかなりの時日を必要とした。そこで海軍では、米軍の来攻を少しでも遅延させるため、米機動部隊のウルシー（ヤップ島東北の米根拠地）帰港の好機をとらえて、本土から長距離空襲をして損害を与え、沖繩進攻を遅延させようと計画した（本作戦を第二次丹作戦と称した）。

本作戦は20年3月11日海軍機二四機で決行されたが、発進がおくれたことや悪天候のため、攻撃部隊のウルシー上空到着が日没後となったために、艦船を確認できず失敗に終わった。なお当時すでに硫黄島の戦も終末に近づきつつあった。

3月15日連合艦隊は、「米機動部隊が3月14日ころウルシーを出航、九州に向かい北進中」との通信情報入手した。3月17日連合艦隊司令長官は

「米機動部隊が上陸部隊を伴っていない場合は、われは攻撃を行わずに兵力を温存する方針である」と指示した。しかし第五航空艦隊司令長官宇垣中将は「機動部隊が上陸部隊を随伴しているかどうかを適時に確認することはきわめて困難である。またその間にも、わが基地航空は米軍に壊滅されるおそれがある」ことを理由に、機動部隊攻撃を意見具申した。大本営および連合艦隊はその意見を認め、連合艦隊司令長官は「兵力温存不能の場合は長官の所信により積極作戦を実施すべき」とを指示した。

連合艦隊司令長官から正式の指示をうけた第五航空艦隊司令長官は、3月17日二二〇〇ころ哨戒機から米機動部隊探知の報告をうけ、攻撃準備を命じ、18日〇二〇五全力（一九三機うち特攻六九機）で攻撃することを命令した。

第五航空艦隊は3月18日未明から米機動部隊に対する攻撃を開始し、20日まで連続三日間攻撃を続けた。この間米機動部隊も九州、四国、中国、阪神地区に対し連続的に攻撃を加えてきた。

日本軍の総合戦果（注）は、空母五、戦艦二、重巡一、軽巡一撃沈と報告され、米軍は甚大な損害をうけて南方に退避したものと判断された。翌21日さらに追撃をかけたところ、日本軍の桜

花攻撃部隊は米軍艦載機の反撃にあつて全滅したので、これまでの戦果の確認はやや疑問に思われた。しかし一応上記の戦果によって米機動部隊は戦力恢復のため、ウルシーに帰港するものと判断された。

わが第五航空艦隊の損害も甚大で、精鋭機の八割一六一機を失ったほか、地上被害五〇機であった。

このようにして日本軍は天号航空作戦の発動に先だつて、その竹幹戦力である第五航空艦隊の大部を事前に消耗してしまつた。

（注）戦後の米軍側発表によれば、空母七隻、駆逐艦一隻の損傷となっている。

天号航空作戦の発動

海軍の決戦思想、海軍は、航空部隊再建の進展と情勢の切迫に伴つて、3月20日、大海指で「帝國海軍当面作戦計画要綱」を発令し「当面作戦の重点を南西諸島正面に指向し、特に航空戦力の徹底的集中と局地防衛の緊急強化により進攻米軍主力を撃滅する。また航空作戦により沖繩に進攻する米軍の大部分を洋上に撃破し、地上防衛軍は米軍の上陸に対してその基地獲得を阻止し、天号作戦の遂行を容易にする」という作戦指導の大綱を明らかにし、積極的な決戦実施の方針を明示した。

このような海軍の戦略思想は、本土決戦を主とする大本営陸軍部の思想とは、根本において差異があり、また、北、中飛行場地区を主力の占領地域から除外した第三二軍の作戦構想も海軍の作戦構想に反するものであった。

天号航空作戦計画における陸海軍航空部隊の指揮関係は、当初は協力関係であったが、3月19日、本土方面の航空部隊については、連合艦隊司令長官が統一指揮することとなり、第六航空軍（陸軍）は連合艦隊司令長官の指揮下に入った。しかし、台湾の第八飛行師団と海軍航空部隊は、いぜん協力の関係にあった。

航空部隊の展開遅延、航空部隊の展開が、計画どおり進展するかどうか当初から問題であったが、航空部隊の練成と展開は、やはり思うように進まず、この作戦に使用できる海軍の航空機は、3月1日現在で第五航空艦隊（鹿屋）約五二〇機、第三航空艦隊（関東）約五八〇機、第一〇航空艦隊（本州）約三、六〇〇機（3月1日練習連合航空総隊を解隊し、第一三連合航空隊を母隊として編成したもので編成途上であった）、第一航空艦隊約三〇〇機であった。その主力である第五航空艦隊は、

前述したように九州沖航空戦で実戦力の大半を喪失し、3月下旬ころには到

底戦機に投ずる十分な作戦遂行は望みえない状態にあった。

機動部隊に対する積極的作戦は、本土東半部に展開している第三航空艦隊等の戦力を九州に推進しないかぎり困難な状況であった。しかし第三航空艦隊と第一〇航空艦隊の大半は、まだ練成中でその技量は低かった。

陸軍航空部隊の主力第六航空軍は、2月末以来、本州中部以東から第一〇飛行団、第六飛行団および重爆二個戦隊等を九州方面に推進展開していた。

当初の計画では、沖繩方面に約一二隊（二隊は一二機）、九州に一五隊の特攻機を事前に展開することになっていた。しかし3月中旬ごろの実情は、第六航空軍の保有する特攻機隊は、総数一五隊にすぎず、そのうち六隊は東部方面に残置を命ぜられ、残りの九隊もまだ九州には推進されていなかった。しかもその九隊も可動できるのは六〇機で直ちに作戦に使用できるものは三隊であった。

台湾に配置された第八飛行師団は、第九飛行団を先島から宜蘭地区に、その他の主力を台湾に展開し、3月中旬にはおおむね作戦準備を完了した。当時の保有機数は各種合計四八一機（内約半数は整備未完）、操縦士は三七三名であったが、本土から編入予定の特

攻機はまだ一機も到着していなかった。天一号発動 連合艦隊は、3月25日一〇〇〇天一号作戦警戒を発令し、翌26日になってその発動を命令した。また

第一〇方面軍も24日には天一号準備を、続いて26日には発動を命じた。

天号作戦は発動されたものの、肝心の陸海軍航空部隊の展開と練成は、前述のとおり思うように進展していなかった。作戦の初動において効果的な攻撃を実施することはついにできなかった。

作戦発動とともに、第三航空艦隊、第一〇航空艦隊が第五航空艦隊に配属された。しかし、その作戦兵力が九州に展開できたのは3月末で、それまでは十分な作戦は実施できなかった。

3月27日、第五航空艦隊の二四機による米機動部隊の攻撃、第八飛行師団の「誠」第三二飛行隊（長広森中尉）九機および独立飛行第四一中隊の二機による嘉手納沖米艦隊に対する特攻などが行なわれた。

28、29日には、再び米機動部隊が九州方面に來攻したので、第五航空艦隊は反撃を行なったが決定的な戦果を収めることはできなかった。

第六航空軍も3月25日、第一攻撃集団を徳之島に推進し、第二攻撃集団を都城に、第三攻撃集団を知覧、万世に、

重爆二個戦隊を熊本および太刀洗に展開させ作戦を準備したが、作戦開始の態勢は容易に進展しなかった。

28日夕刻第八飛行師団から「約一〇〇隻の輸送船団が沖繩本島南方から北上中で、本夜半以降本島付近に到着」との緊急報告があった。第六航空軍からの偵察機がさらにこれを確認した。第六航空軍は直ちに攻撃の部署をとった。その使用兵力は重爆一〇機と第三

攻撃集団の襲撃機および戦闘機三個中隊であった。29日払暁沖繩本島南側および慶良間付近の艦船を攻撃し多少の戦果を収めたが、第八飛行師団報告のような輸送船団は発見できず、第六航空軍では攻撃開始が過早であったとの印象をもった。

第八飛行師団では、26日天号作戦発動の命令により同日から慶良間周辺の米艦船に対し特攻四五機、爆撃機一七機を使用して攻撃を行ないその戦果は撃沈破三一隻と報告された。

しかし「連合艦隊および第六航空軍はいぜん攻撃準備中であって、主力の攻撃開始は更に数日遅延の見込み」であるとの電報を傍受したので、同飛行師団は過早の兵力投入をいましめ、適宜これを抑制しながら好機を捕捉して行なう一部の攻撃だけを続行することとした。

この第八飛行師団の攻撃において沖繩から発進したのは特攻機一八機であった。これらの特攻機は、神参謀の直接指導のもとに、27日武烈隊（長廣森中尉）九機が、ついで29日には赤心隊、芙蓉隊が壮烈な攻撃を敢行して困難に殉じ、第三二軍の全将兵を感泣させた。沖繩本島からする攻撃はこれが最後となった。

29日から31日にわたり第五航空艦隊、第六航空軍、第八飛行師団はそれぞれ一部の部隊をもって米機動部隊や沖繩周辺の米艦艇に対し攻撃を続行し戦果をあげたが、決定的な戦力を投入して米艦艇に痛撃を与えることはできなかった。

かくて天号作戦初動の貴重な戦機は去り、米軍はほとんど無傷で沖繩本島に上陸することとなった。

空海部隊の総攻撃の開始

連合艦隊の総攻撃計画

連合艦隊は、前に述べたように、第三二軍に対し直接攻勢の要望を行った。4月4日に、第三二軍が7日夜から攻勢を決定する旨の通報をえたので、海軍は航空部隊はもとより、海上特攻隊まで編成して沖繩に突入させ、陸上部

隊の攻撃に呼応して総攻撃を敢行することを決定した。

この計画は、4月5日に連合艦隊および第六航空軍の全力を挙げて、沖繩に対する航空総攻撃を行なう(この作戦を菊水一号と命名)とともに、瀬戸内海に待機中の残存海上部隊の主力——第二艦隊司令長官伊藤整一中将の指揮する戦艦大和をはじめ軽巡矢矧、駆逐艦八隻(雪風、磯風、浜風、冬月、涼月、霞、初霜、朝霜)で海上特攻隊を編成し、沖繩の米軍泊地に突入させることとなった。それは、帝國海軍が残り持っていた各種一流軍艦のほとんど全部と言つてよかつた。

航空総攻撃——菊水一号作戦

菊水一号作戦は、わが兵力整備の都合により、予定よりも一日おくれ、4月6〜7日の両日にわたつて決行された。

4月6日沖繩本島周辺海域の米艦船は、戦艦九、巡洋艦一五、駆逐艦三二、輸送船六四その他五八隻を数えた。

台湾の第一航空艦隊、第八飛行師団もこれに呼応して攻撃を実施し、その総参加機数は、特攻機三五五機を含む六九九機であった。

この攻撃は奇襲に成功し、大戦果を収めたと報道された。大本営は4月8

日に、5日夜以降米軍に与えた損害は、撃沈戦艦一、空母二、艦種不詳六、駆逐艦一、輸送船五、撃破戦艦三、巡洋艦三、艦種不詳六、輸送船七と発表した。この種航空作戦の戦果の確認は、なかなかむずかしく、部隊からの重複報告等のため、誤算を生じやすいものであったが、戦後の米軍の発表によると、沈没は駆逐艦三を含む計六隻、損傷は空母二、戦艦一、駆逐艦二一その他米海軍に与えた損害は相当なものであった。

航空総攻撃の経過と 義烈空挺作戦

航空総攻撃の経過

さきの4月12〜13日の第二次航空総攻撃に続いて、4月16日には第三次総攻撃が決行された。この攻撃で米駆逐艦ラッフェイは、特攻機六機が命中してめっちゃめっちゃになり、空母イントレピットやその他多数にも損害を与えた。スプールアンス提督はニミッツ司令官に次のように報告した。「日本軍の特攻攻撃は熟練かつ効果的であつて、艦艇の損害がきわめて大きいため、あらゆる手段を尽くして、今後の特攻攻撃の阻止をはからねばならない。よつ

て全空軍を動員して、九州および台湾における日本軍飛行場に、できるかぎりの攻撃を実施しよう進言する」日本本土の航空基地は何回となく米空軍の攻撃をうけたが、巧みに秘匿された特攻機は、引き続き沖繩目指して攻撃をくりかえした。米軍の慶良間の泊地は損傷艦で一ぱいになった。日本軍の特攻で大損傷をうけた空母フランクリンをはじめとする多数の艦船が、パナマ回りで修理のためにニューヨークへ帰つた。

その後日本軍の第四次、第五次総攻撃が実施され、第三二軍攻撃の5月4日には第六次総攻撃が、ついで5月11日には第七次総攻撃が決行され、またこの間にも連続不断の小規模な攻撃が実施された。4月6日から5月4日まで使用された飛行機の総延べ数は、五、〇六八機(うち特攻一、七一一機)におよび、一、六一一機が失なわれた。

海軍は既述のとおり、沖繩作戦には3月ころから非常な期待と熱意をもつた。戦況の進展とともに当面可能な全戦力を投入した。さらに4月下旬には逆上陸まで考慮し、その計画が検討されたが、陸軍側はこれと趣を異にしていた。「沖繩作戦のねらいは、本土決戦準備のための、出血持久作戦を行なうこと」にあった。本土に約六〇個師

団の戦力を準備しつつある陸軍としては、増援の方策もなく、二個師団余りの兵力しか存在しない沖繩で、決戦を遂行する構想は持ちえなかつたのである。したがつて陸軍側は、第三二軍の攻勢失敗による戦況悪化にとまなない、逐次大号作戦の前途に見切りをつけ、本上決戦に徹底しようとする傾向があらわれはじめた。

米空軍の反撃の激化

日本軍の航空特攻に悩まされた米軍は、5月に入るとにわかに活発な空軍の反撃を開始した。その一つは、B-29と機動部隊による九州攻撃であつた。二日間の来襲機でさえも、B-29延べ約三〇〇、艦載機延べ約一、六五〇に達した。しかしこれは日本軍航空の活動に相当の制約を与えたが、掩護施設が徹底していたので、飛行機の直接被害は比較的少なかつた。

他の一つは、沖繩周辺における日本軍の特攻機に対する迎撃作戦であつた。これは米軍が沖繩の基地を本格的に使用しはじめたことと、優秀なレーダー装備、暗号解読能力などを駆使する迎撃戦法が、逐次整備向上されたことなどによるものであつた。米軍ではレーダー、ピケ・ラインの艦艇が日本軍の航空攻撃で最も損害をうけた。米軍は中部太

平洋や北太平洋、さらに大西洋の駆逐艦を沖繩に急行させ、穴のあいたピケ・ラインの部署につくよう命じた。この迎撃態勢の整備は、日本軍の特攻作戦に致命的な打撃を与えた。

さらに、日本軍の特攻機の迎撃作戦を強化するため、米軍は戦史上前例のない多数の空母を、沖繩周辺に長期にわたり行動させたことである。4月末までに、多数の艦艇が撃沈されたり大損害をうけたため、部隊と艦艇の新鋭交代要員がたえまなくつきこまれた。

当初米軍がいだいた「迅速な勝利」の希望が、今や中途にしてつぶれ去ったので、米空母は沖繩周辺に居すわって、日本本土の航空攻撃、特攻機の迎撃戦闘、上陸軍の戦闘協力に従事した。

これらに対し、日本軍の特攻機は多数の改修練習機を含み、その器材も不備であったり操縦士は烈々たる報国の赤誠に燃えていたが、遺憾ながら、一般的には練度が低く、しかも、航路は南西諸島ぞいの一本来に限定されていたので、準備万全な米機の迎撃に会い、損害にくらべて戦果は逐次低下していった。

このような状況で、5月11日、第七次総攻撃を敢行したが、二一七機（うち特攻一〇四機）を使用し、一〇九機を失って、戦果は輸送船一、船種不詳

七の撃沈破が報告されたのみの不振に終わった。

そこで義烈空挺隊の投入（義号作戦）が行われた。

義号作戦に直接連携する5月25日の航空攻撃は、海軍が24日午後、米機動部隊を発見してこれに戦力を投入し、また第八飛行師団は天候不良のために参加できなかったので、第六航空軍のみで実施した。しかしこれも天候不良のため引き返すものが多く、大きな戦果は収めえなかった。次いで天候の回復をまって27、28日に総攻撃が実施され、使用機数は前回とあわせて、七三七機（うち特攻二〇八機）に達したが、戦果は撃沈一〇隻、撃破八隻と報せられたに止まった。

陸軍の天号航空作戦の中止

陸軍は沖繩作戦の推移と、既に予定した可動航空機の大部を投入した現況とにかんがみて、いよいよ天号航空作戦の続行困難と考えた。たまたま、連合艦隊司令長官豊田副武大將が軍令部総長に転補し、後任に第六航空軍司令官菅原道大中將よりも後任の小沢治三郎中將が親補されたのを機会に、陸軍は5月28日零時をもって第六航空軍を連合艦隊司令長官の指揮下から航空総

軍司令官の指揮下に復帰した。

かくて、大本営は航空総軍司令官に対し、南西諸島の今後の作戦目的は「敵二最大ノ損害ヲ与ヘ敵爾後ノ企図ヲ阻止スルニ在リ」と命じたが、一般的には天号航空作戦を打ち切り、日本本土防衛のための決号作戦準備に移行した。

海軍は陸軍と異なり、いぜん天号航空作戦に熱意をもち続けた。6月1日の情勢判断でも、天号航空作戦の戦果を相当確信し、その続行を確認した。しかしこのころは戦力も低下し、従来

の決戦思想にくらべると、その方策も内容も相当後退していた。

少飛会海法画



協会発行の書物紹介

〔小冊子〕

○遺書遺詠に偲ぶ特攻隊員の心情 A5版 60頁 六〇〇円

○特攻隊員の日記 A5版 70頁 七〇〇円

〔単行本〕

○B29との戦い A5版 160頁 一、五〇〇円

○特攻隊遺詠集 A5版 21頁 二、〇〇〇円

○愛は終り無く A5版 209頁 一、五〇〇円

沖繩洋上に散華した特攻隊員と将来を約束した一女性の回想記 長い日付 A5版 120頁 一、〇〇〇円

生き残り特攻隊員の手記 会員吉武登志夫氏（陸士57期）著

会員の発行した単行本

○特攻の真証

A5版 210頁 一、八〇〇円＋税

○静椰子 A5版 334頁 二、〇〇〇円＋税

右の二冊は会員小川武氏（特操一期）の体験記で、鳥影社から出版されている。希望の方は事務局まで連絡下さい。

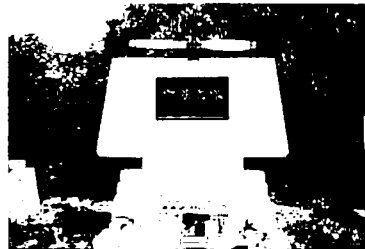
○特攻の真実 四六版 340頁 一、八九〇円

会員深堀道義氏（海浜75期）が研究成果を纏め原書房から出版されたもの。希望の方は事務局まで連絡下さい。

沖繩航空作戦における陸海航空部隊の投入並に損失機表
自4月6日至6月22日「大東亞戦争全史」より

	月	日	第五航空艦隊		第六航空軍		第一航空艦隊		第八飛行師団		計		
			投入機数 (特攻機数)	損耗機数	投入機数 (特攻機数)	損耗機数	投入機数 (特攻機数)	損耗機数	投入機数 (特攻機数)	損耗機数	投入機数 (含む特攻機)	投入特 攻機数	損耗機数
第一次 総攻撃	4	6.7	443 (201)	162	209 (118)	138	19 (8)	9	28 (28)	26	699	355	335
第二次	〃	12.13	179 (92)	101	173 (90)	97	21 (12)	1	19 (8)	6	392	202	205
第三次	〃	16	375 (132)	110	105 (50)	63	16 (13)	1	2 (1)	2	498	196	182
第四次	〃	21.22	111 (49)	35	111 (36)	52	42 (20)	5	53 (26)	29	317	131	121
第五次	5	4	195 (75)	49	95 (50)	61	37 (37)	11	54 (34)	38	381	196	159
4月6日~5月4日 小規模攻撃	5	4	1,963 (373)	308	325 (91)	144	289 (89)	53	203 (108)	104	2,781	631	609
計			3,267 (922)	771	1,018 (435)	555	424 (149)	80	359 (205)	205	5,068	1,711	1,611
第六次	5	11	137 (64)	61	79 (40)	48					217	104	109
第七次	〃	24.25	334 (98)	45	106 (20)	38			5 (5)	5	445	123	88
第八次	〃	27.28	221 (46)	34	71 (39)	46					292	85	80
第九次	6	3.7	161 (6)	20	71 (31)	36	13 (9)	3			245	46	59
第十次	〃	21.22	234 (45)	54			23 (23)				257	68	54
5月11日~6月22日 小規模攻撃	5	11	772 (34)	70	292 (96)	102	81 (43)	26	183 (83)	59	1,328	256	257
計			1,860 (293)	284	619 (226)	270	117 (75)	29	188 (88)	64	2,784	682	647
総計			5,127 (1,215)	1,055	1,673 (661)	825	511 (224)	109	547 (293)	269	7,852	2,393	2,258

空華之塔



摩文仁台上にあるこの碑の建碑の際の募金趣意書は次の通りであり、今次大戦で散華した航空関係者を祀るものである。米軍占領下に企画し建立されたので、趣意書にもその配慮が窺える

碑の文字は航空総軍司令官だった河辺正三大将の揮毫したものである。

除幕式は39年11月1日に行はれ、河辺大将と第二航空艦隊司令長官だった寺岡蓮平中將等が参列した。

除幕を行ったのは地元出身で特攻戦死した伊舎堂用久少佐の母堂ミツ様だった。

空華の塔建立趣意書（昭和三十八年八月）

太平洋戦争は沖繩を天王山として終結しました。例え悲しい敗戦に終わったとは申せ、地球の半ばを覆う広大な戦域を舞台として、優勢な連合軍の空軍を相手に戦い抜いた我が航空勢の健闘は、国民は申すに及ばず世界の人々のひとしく認めるところでありまして、軍官民の搭乗員はもとより整備、補給通信、整備等に從事した人達や、飛行機その他航空器材の生産に日夜精魂を傾注された人々の偉大な功績は、我が国の歴史と共に永久に忘れぬことの出来ないところであります。

特に沖繩戦に於きましては、本土防衛の防波堤として莫大な人員と航空機を投入、前途有為の若者が護国殉忠の一念に燃え、祖国の勝利を信じてつつ若き命を沖繩の空に散らせたのであります。

我々生き残り航空関係者は、かつて世界に雄飛し太平洋戦争で示した我が航空の偉業を、後世に伝えると共に再建日本の航空の発展を祈念する方途を考えていたのでありますが、今回在沖繩有志と本土関係者共々相諮りまして太平洋戦争で最大の犠牲を出した沖繩に戦没航空人の記念塔を建立することに致しました。塔は「空華之塔」と名付け沖繩並びに太平洋航空戦に散華した先輩、同僚やこれらと運命を共にした航空器材の冥福を祈ると共に再建日本の航空発展を祈念するの趣旨と致しました。

沖繩に散ったある特操一期生の戦友①

田淵 鷹 夫

あの苛烈な大戦末期にペンを操縦棒にかえて奮闘し祖国のために散華された数多い同期生のためにも、吾等の闘いのあとは埋没されてはならないと思います。

学鷲の先輩として特操一期の後輩四機を沖繩上空まで誘導し夕闇迫る慶良間海上の米艦船に見事突入に成功させた、飛行二十六戦隊付坂本隆茂中尉がいた。

坂本中尉が、この特攻攻撃のすべてを詳細に記録された「沖繩特攻」の一文ほど私の心を打ったものはありません。読むうちに、万感胸に迫り、涙に文字がかすむのも度々でした。同期の四名の凄絶なまでの戦いを知り、そこに真の学鷲、特操一期生の姿を見た思いがしました。

坂本さんは復員後、あらゆる手づるを求めて四人の遺族を探しあて、それぞれの遺族を訪問し、見事な最期を伝えるとともに墓前に額ずかれたとのことです。編集委員会と坂本さんのご厚意によりこの一文を掲載していただくことになりました。心から感謝いたします。

なお散華された戦友は次の四名です。

- 誠第二十六戦隊 昭和20年5月17日慶良間東方
- 稲葉 久光殿 今野 静殿
 - 白石 忠夫殿 辻 俊作殿 合 掌

坂本隆茂氏は神戸商業大
学在学中は学生航空連盟に
所属され、昭和16年12月繰
上げ卒業、第七期操縦候補
生として軍籍に入り飛行二十六戦隊に所属しニュー
ギニア、フィリピンを転戦、台湾花蓮港において終
戦を迎えられました。

編者注 この記事は特操一期生史に掲載されたものを小川武氏が投稿せられ、沖繩慰霊行を主体として編集しようとする今回の会報に相応しい内容であるが、全文を一回に載せるには長過ぎるので、二回に分けて掲載することにした。

沖繩特攻

坂本 隆 茂

あわれ 出立

「口今より、坂本編隊沖繩攻撃に出発、目標、慶良間列島の敵艦船群。突入時刻19時30分、終り」

特攻隊員四名と私は、二列に並んで申告終るや否や一斉に敬礼を行った。

最後の挨拶である。

「うん。しっかり頼む」。部隊長の声は短かった。傍には参謀が、感慨深く見つめている。

部隊全員のまなざしが、すべて私達にそそがれているのを頬に感じた。

とうとう来る所迄来てしまった。

もう何もかも、どうすることも出来ない。私達は

行くのみである。

昭和20年5月17日、午後4時。

台湾は東海岸、花蓮港飛行場のお粗末な戦闘指揮所の前である。

ジリジリと灼けつくような南方特有の日射しが照りつけ、風はそよともしない。

湯呑茶碗が我々の手に渡された。

参謀が持参して来た司令官心づくしの清酒は、部隊長の手で注がれた。乾盃。

「御成功を祈る」

誰の口からか、ぼつりと洩れた。

成功？ 成功？ 私は胸がしめつけられた。

こんな惨酷な門出があるうか。何とまびしい戦の世界か。

往く者、送る者、それぞれ割り切れぬ思いを胸に秘めている。

部隊長、参謀等、次々と手を握りしめてくれる。だが、もう何の感慨も湧かない。

私は体ばかりでなく心までが、唯機械的に動いているに過ぎないようだ。

抵抗しようもない怒濤にもまれながら、どこかへ押し流されている。そういう状態であった。

考えるゆとりもない。心の救いを求める努力も湧かない。

いよいよどたん場へ来たと思う放心に支配されていた。

やがて飛行場は轟々たるエンジンの爆音につつまれ始めた。

離陸前に行く試運転の音、整備員が今や心をこめて調整をしてくれている。

ふと我にかえった。
任務完遂は何か無事飛んでくれと心に念ずる。
元々我々飛行第二十六戦隊は軽爆撃機の専門部隊、殊に降下爆撃はお家芸であった。

大東亜戦争の勃発と同時に、満州の白城子で編成され、緒戦以来南方に進攻して作戦に従事して来た。当初はノモンハン時代の97式軽爆をいまだ使わされ、とても米軍とともに太刀打ち出来るしろものではなかったが、比島の治安作戦等には結構役に立った。

その後ソロモン、ニューギニア方面へ転進する頃、漸く99式軽爆撃機に変えてもらったものの、その時は既に戦場の制空権は、完全に米軍に掌握されて、このような飛行機では手も足も出なくなって、部隊は消耗してしまった。最後はとうとう戦闘機をあてがわれた。一式戦闘機「隼」である。

開戦以来の激しい消耗戦で日本の戦闘機操縦者は、またたく間に激減した。

窮余の一策として我々のような専門外の部隊に「隼」を与えて、泥縄式訓練が行われた。

パレンバンで英国機動部隊を撃退した迄はよかったが、比島のレイテで二度目の全滅をくらった。

昭和19年12月、レイテ生き残りは内地で戦力恢復を命ぜられ、我々は明野で新部隊長を迎え、兵員と飛行機の補充をもらった。

三カ月の速成訓練で部隊主力はシンガポールへ発つていった。

私はまだ整備の終わらない数機とともに、ゆっくり後続して来いと命じられたのも、新婚間もない私への部隊長の思いやりであつたらう。

私達後続部隊が出発したのは、桜もほころびる3月も終りであった。

明野から宮崎に飛んで着陸してみると、そこには参謀が待ちうけ緊急命令を与えた。

沖繩の戦況が逼迫している。

南方に行く飛行機は全部無条件で台湾にいて、第四航空軍の傘下に入れ、沖繩を通過しては危い。

お前は上海経由で台湾へ赴き、数日前に出発した中隊長と合流すべしと云うのである。

正直な所嫌な気がした。シンガポールにゆけば、

まだ余命はあろうと思っていたが、台湾とあらば沖繩攻撃である。最後は特攻に繰り出されるであろう。

もうこの頃は戦争をやっている我々にも、戦局がすでに終の段階にきていることが、ひしひしと身にしみていた。

ペンを捨てて

予感半分当って半分はずれた。

なぜなら二カ月後の今、私は特攻隊員と一緒に沖繩に向って離陸しようとしている。

私自身に与えられた任務は、特攻四機を沖繩まで誘導し、且つ戦果を確認して帰還すべしである。体当りせよとの命令ではないから特攻隊員とは申せない。

だがこの頃の誘導機は九分九厘帰還していなかった。

特別攻撃隊というものは、必ず護衛の戦闘機に護られて進攻し、体当りの戦果を確認してもらうのが常道である。

沖繩作戦の初期の頃は、相次いで多数の特攻を進発させ、護衛戦闘機が上空を掩護していったが、米軍の物量には如何ともし難く、護衛部隊の大半は常に帰って来なかった。

我が方の戦力は急速に低下し、掩護など、ぜいたくなことを言っておられない程息切れがして来た。

全くの丸腰で決死でなく必死であった。

今、私と共に出発しようとしている稲葉、今野、白石、辻は、いずれも師範学校を中途で放棄して軍籍に身を置かせられた、特別操縦見習士官出身の可

愛い少尉ばかり、充分の訓練も受けていないが、早くより特攻要員として修業させられて来た。

かげながら随分悩んでいるらしい様子もあつたけれど、今や私のごときの及びもつかぬ明鏡止水の境地にあると見受けた。困を思う一途の赤心には全く頭が下がる思いがした。

五名のうち割切れないのは私だけであつた。技術未熟の彼等は、飛び上がるのがやつとのこと、長距離飛行など思いもよらない。途中で私を失えば、目標一つない海上で進むことも帰ることも困難である。

私のようなものでも、信頼してついて来てくれるのだ。

心の中で手を合せて拝んだ。

ガソリンは片道だけ

もし戦の世に奇蹟があれば、私は生還できるのだ。

唯、それを希うにはあまりにも伏勢はきびしかった。目標の上空で被弾することがあれば、勿論私も

体当りを敢行する位の覚悟はあった。

否、その他に途はなかったからだ。

だが此の場合には特攻四機の戦果を誰が確認してくれるのか。そして私自身の体当りすら誰も認めてくれないであろう。

愈々飛行機に搭乗しなければならぬ時間が迫って来た。直立した四人の瞳が私の指示を待っている。私は彼等の前に立った。そしてじっと見つめた。緊張した顔ではあったが、誰も恐怖を表わしていない。

若いながら何と立派な、と思いつつ私は此の世で与える最後の言葉に苦慮した。

作戦の打合せは既に済んでいる。此の期に及んで何を言わなければならないのか。離陸した後は信頼し合う魂があるだけではないか。それでも私は恰好をつけるため、ぐっと唾をのみこんで一息で言ってしまった。

「絶対に俺を信じてついて来てくれ、それだけだ。終り」

「はいっ」

四人は一斉に答えてくれた。

私は彼等の一人一人とゆっくり力強く手を握りあつた。

出動命令を受けて以来、朝から機械的に動いていた気持ちも、この時初めて別離の悲壮が実感として湧いてきて、ぐっと胸につまった。

私は落下傘をつけていたし、海上に不時着したとき浮くことの出来る救命胴衣まで施されていたが、彼等はそのようなものは、全く受けつけなかった。その代り飛行帽の下には日の丸を染めぬいた鉢巻

をしていた。

私は帰りの機上でしたためる夜食まで準備してもらっていたが、彼等は私と一緒に宿屋で食べた早目の夕食が最後であった。

特攻機にはもちろん爆弾が吊りさげている。

あの軽い戦闘機に、よくも二五〇キロ爆弾を左右の翼に下げたものだと思つた。……その爆弾は機体から離れるようにはしてなかった。

人も機体も爆弾と一体となって突入するのだ。ただ、突入する直前に、座席にある針金を引いて、

弾の先端の安全装置を外しさえすれば、突入の瞬間炸裂する仕組になっていた。

ガソリンは満載しても三時間程度、単としては沖繩までが精一杯であった。

更にまた特攻機には、無線機もなければ機関砲まで取りはずされて全くの丸腰であった。

敵の哨戒機に遭遇すれば万事休す、無念であるが致し方ないことであった。

そればかりではない。特攻機の翼や胴体に描かれてあった日の丸さえも、軍命により完全に塗りつぶされてあった。国籍不明機である。

戦時国際法上からこれが許されるかどうかは私は知らない。

目標突入前に米軍哨戒機群の餌食にならないよう考えたものかと思うが、軍首脳部の自棄的な作戦と思われてなさげなかった。

つまりきのランプ・アウト

誘導機である私の機体には、爆弾代わりに魚雷型の増加タンクを取りつけた。

二〇〇リットル入り二本、ドラムカン二個分である。

これだけ燃料を増やして台湾・沖縄往復がどうやら可能であった。

この燃料を使い果せば、用のすんだタンクはスピードの邪魔になるばかり、スイッチを押して海中に捨て去られる運命にあった。

私の機には無線機を搭載した。戦果確認報告のためのものである。

会話は禁ぜられ、不得手なモールスでやらねばならぬ。そこで対空無線班と打ち合せて簡単な符号をきめてお茶を濁すことにした。

もした、私が自爆せねばならぬ時は、この無線機が、私の最期を基地に知らせてくれる一縷の望みはあるが、その頃の無線機能は極度に低下して、とても期待はもてぬしろものであった。

※

試運転を終えた飛行場はもとの暑い静けさに戻った。飛行機はわれわれの乗組むのを待っていた。

出発を決意した。

「まわせ！」飛行機の方へ力一杯となりながら、右手を大きく円を画いて合図した。

五機一斉に始動。

われわれは始動車に飛乗り、見送りの人々に手を取りながらそれぞれの愛機のもとへかけつけた。

「異常なし」機付長は報告した。

「御苦労」愛機『ちくご』の操縦席に飛びこんだ私の眼と手足は、いつもの習慣通り機械的に点検をはじめていた。

エンジンの全力回転を終り、増加タンクのガソリンに切換えた途端、異常を発見した。燃圧計がドロップするではないか。一大事である。これでは片道飛行しか出来ない。

「おい、駄目だ。一寸来てくれ」

機付長を呼んだ。機付長はプロペラの風をまともに受けながら翼を這い上ってきた。

「吸上げが悪い。危い、何とかしてくれ。時間がなから怠いでたのむ」

彼は座席にもぐり込んで、あれこれ苦心している、どうも芳しくない様子。時間は刻々と経過する。ジリジリしてきた。

特攻機の方はそろそろ準備完了して、私の方を向いて合図を待っている。

沖繩突入時刻は正確に19時30分たるべしと定められてあった。

この時刻は、攻撃の成否に関係が深かった。

夕開正に迫らんとする薄暮、突入する空からは艦船が見えて、敵からはこちらが見えないという理由からであった。

米軍のレーダーがどんな精巧なものかは、終戦後判ったことだが。

離陸が遅れるならば、日が暮れて目標が見えなくなってしまう。この重大時期に、出発からつまずきとは何としたことか。

興奮と焦りが交錯して来たが、逆に意を決して日頃の愛機を見捨てることにした。

「予備機をまわせ」私の声は上ずってしまった。機付長ら整備員はこまねずみの如く動き出した。

テイク・オフ

おんぼろ予備機が掩体より引き出され、燃料補給、無線機の積み直し、すべての系統の急速点検である。最早一刻の猶予も許さぬ。

少々の不備は目をつぶって飛んでゆこう。

こうなれば帰還はいよいよ望むべくもない。しびれを切らした特攻機は、車輪止めを外して動きかかっている。

まだ座席にも上がっていない私は、手を振って各機出発点へ行って待機するよう命じた。

爆弾をぶら下げて、如何にも重々しい四機は、ゴツゴツした感じで地上滑走を始めて、滑走路の北端へと向って動いていった。

いよいよがまんでできなくなった私は、機付長をせき立てて操縦席に飛び乗った。

全力試運転もそこに片付けた。

指揮官機がおかれて出発点に向う恥しさはどうしようもなかった。車輪止めを外せの合図をするや否や、私は急速度で飛行場をつつ走り、四機の待ち受けている出発線へ飛びこんで、グイトブレーキを踏んで指揮位置についた。一〇分遅れた。

どうして取り戻すか、飛行中に対策を考えることにした。出発早々から黒屋、私の心は重かった。

然しこのどたんばであわてては、失敗の上塗りをやる惧れがある。

二、三度大きく深呼吸をした。

後ろに左右を見やれば、二機ずつが斜め後方に整列してじっと見つめている。

もうお互いに話すことが出来ない。

これからは顔を見ながら手で合図するだけである。発着係の赤旗がサッと白旗にかわった。

「出発」

手を上げて左右を振りかえった。彼等も直ちに手をあげて私に応答した。

フラップ半開、エンジン全速。

花運港飛行場の青草が矢のように彼方に流れ出して機体は真南の方へべく進んだ。

容易に浮ばない。燃料が重いからだ。いつもの倍近く滑走して漸く浮いた。

重い危険物をかかえた訓練不足の彼等が、無事離陸出来るかどうか、かなり困難である。

編隊離陸をやめて、空中集合に、時間はかかるが単機離陸にしたのも安全と考えてのことであった。

今迄に特攻機離陸時の事故を何回となく聞かされてきたからだ。

無事浮いてくれ、心に念じながら上昇しつつ彼方を振りかえった。

二番機がすぐ後に続いている。三番機も浮いた。海岸よりに旋回しながら集合しやすいうように速度を落した。最後の機が浮いて、一時に力の抜けるのを感じた。編隊を組み終ってゆっくり旋回。

機首をめぐらせば一点の雲もなく、海はあくまで紺青である。汗が次第に引いていった。

今までの焦りと暑さがうそのように、次第に冷静になってきた。

いつもの訓練のような錯覚に襲われた。

特攻機はびたりとついていて、見事な編隊ぶりである。見下ろせば海岸にくっきりと四角な花運港飛

行場。

われわれは高度五〇〇メートルで一度その真上を南から北へ抜けながら翼を振って地上の見送りに最後のあいさつを送った。

地上からは盛んに白い布が振られている。立派な編隊が頼もしかった。

然しあまり長時間の編隊に精神を集中するの余り、彼等が疲れて、いざというとき頑張りがかかなくなることを惧れて、飛行場が見えなくなつてから、もう少し離れると合図してにっこり笑つてみせた。今までの緊張がほぐれたらしい表情が彼等から見とれた。

有無をいわせぬ

飛行帽の下のレシーバーからは、対空無線の雑音がジージーと間断なく流れてくる。

うるさくて仕方がない。
突入する以前に私からの発信は、特攻機の行動を米軍にさとられぬよう、如何なることがあつても禁じられていた。唯、地上からの連絡を聞くだけである。

私はレシーバーをもぎ取つて、地上から何と言われようとも聞いてやらぬと決意した。自らをわざとつんばにして全精力を、誘導と体当りに集中することにしたのだ。左は岬々たる新高山系である。

沖合一キロ辺りを、海岸線に沿って一路北へ北へと高度をあげて進んだ。沖縄は台湾のほぼ東に当るのに何故北へ向うのか。ギリギリの燃料なのに何故回り道をするのか。それには理由があつた。

米軍の航空母艦群が、台湾東方海上に接近しているらしいとの情報を手入していたからである。

沖縄へ直行する途中で、敵の哨戒機に引っつかかれれば一たまりもない。参謀からも、一旦台湾の北端へ出てそれから沖縄へ向うよう注意されていたのである。

私が参謀から受けた戦闘指揮要領は、他に幾つもあった。

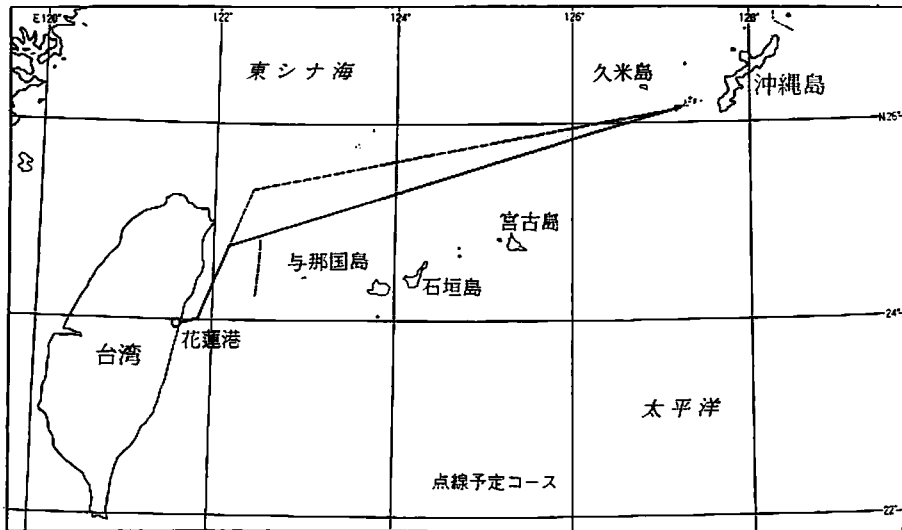
その日の朝、突然、部隊は台北の師団司令部より、特攻四機の出撃命令を受けた。間もなく、軍参謀が作戦指導のため台北から飛んで来た。かねてより期する所はあつたものの、まさかこの日に誘導の命令を受けようとは思つていなかった私は、途端に泡をくつた。

特攻隊員は平素から身も心も準備が出来ている。私だけがあわてて出動の準備をする始末であつた。

ばたばた用意しながら、結婚したばかりの妻のおもかげがふつと頭をかすめて、靖国神社がいやでも浮んで来た。参謀に私の気持など判らうはずはない。戦争を通じて、一番嫌いな人種は、敵よりも味方の参謀であつた。操縦桿も握つたことのない、地上より転科して来た参謀が、どうして飛行機乗りの気持を理解してくれよう。軍の参謀は到着するや否や、びしびしとそして事務的に、私の心の抵抗をおかま

いなく指導していった。

○……沖縄の戦況は日に不利である。地上軍は次第に南方に追いつめられ、最早や全滅は時の問題である。といつて航空軍としてもこのまま見捨てるわけにはゆかぬ。死闘の続く限り友軍の士気を鼓舞すること及び敵の戦力を少しでも消耗させなければならぬ。



○……米軍の台湾上陸の公算大なる昨今、それに備えて台湾所在の飛行機を温存したい。さりとて沖縄攻撃を抛棄しない以上、少数機による特別攻撃を敢行することになった。(25頁へ続く)

義烈空挺隊出撃前日

熊本健軍飛行場三角兵舎内にて小柳カメラマンの撮った写真をもとに故松本武仁画伯の画いたもの



遺書を書く隊員

有金は国防献金に



靖国神社には入場料はいらないなどと話していたら、山城准尉が三途の川の渡しくらい残しとけと言ったとか、(不時着生残りの者の談)不時着負傷して入院したが日用品を買う金もなくて困ったという。

沖縄作戦における対艦船航空特攻の機種
(陸軍の部)

多い機種4点を海法画伯の彩管に依る



99 雙
64 振武



4 式戦
58 振武

使われた機種の数

- 1 式 戦 — 202
- 97 戦 — 178
- 99 雙 — 139
- 4 式 戦 — 114
- 3 式 戦 — 110
- 99 高 練 — 45
- 4 式 重 — 31
- 2 式 双 襲 — 30



97 戦
77 振武



1 式 戦
29 振武

沖縄作戦における対艦船航空特攻の機種

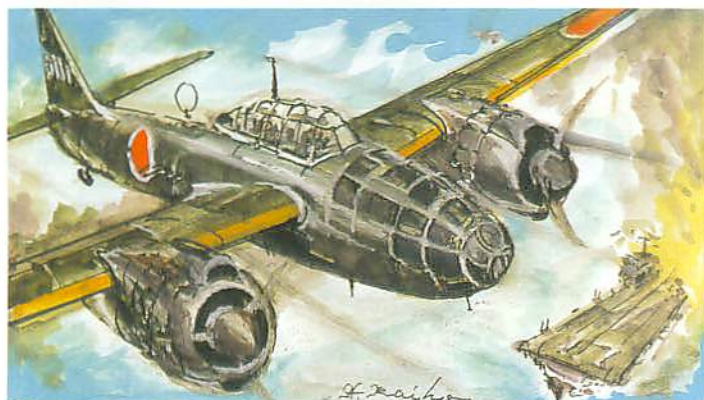
(海軍の部)

市川画伯の桜花のほか多い機種3点を海法画伯の彩管に依る

零戦52型
海法画



陸上爆撃機銀河
海法画



艦爆彗星
海法画

使われた機種の数

零 戦	—	321
99 艦 爆	—	86
97 艦 攻	—	67
彗 星	—	61
白 菊	—	56
銀 河	—	45
桜 花	—	40
1 式陸攻	—	35
零式水偵	—	25
天 山	—	24
94 水 偵	—	18
93 中 練	—	7

桜花
市川国雄画

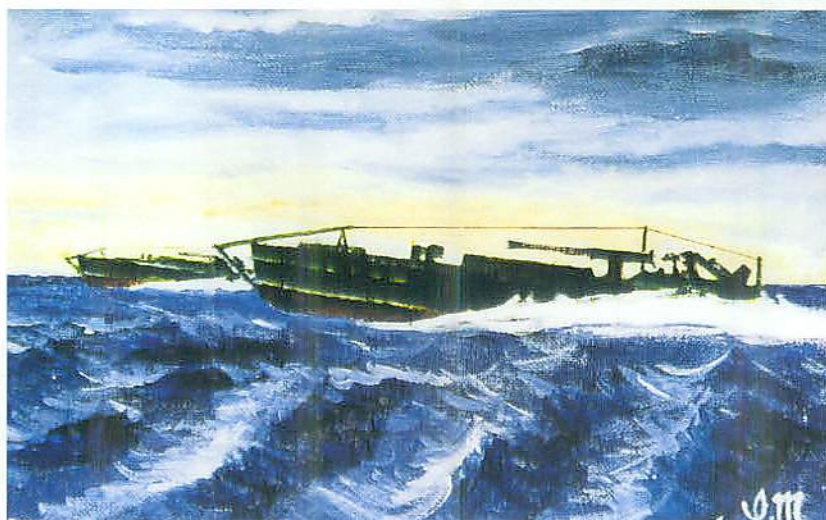


陸軍
の



松本武仁画

水上特攻



海軍震洋

満野功画

水中特攻



小灘利春画

回天の特眼鏡の視野
目標艦の態勢、速力を短時間で
観測、照準をつけ突入する

○……本日の攻撃目標。慶良間列島の敵艦船。攻撃時刻19時30分。

○……護衛戦闘機はつけない。敵戦闘機と遭遇した場合に空中衝突せよ。

○……突入前に無線の発信を封ずる。

○……石垣島の西方より高度ゼロ、即ち海上スレスレに接近せよ。

○……不時着飛行場は石垣島のみ。此所の地上部隊には本日の作戦は連絡済み。夜間不時着の場合は翼灯を点滅せよ。

○……誘導機自爆せんとするときは、連続長音を発信しつつ突入せよ。

○……本日の夜は月齢一。即ち真の闇夜である。帰還の場合は台湾の山にぶつけるつもりで帰ってこい。

ざっとこのような具合である。

航続距離の短い戦闘機では、昼間でさえ台湾、沖縄の片道飛行がいとこである。

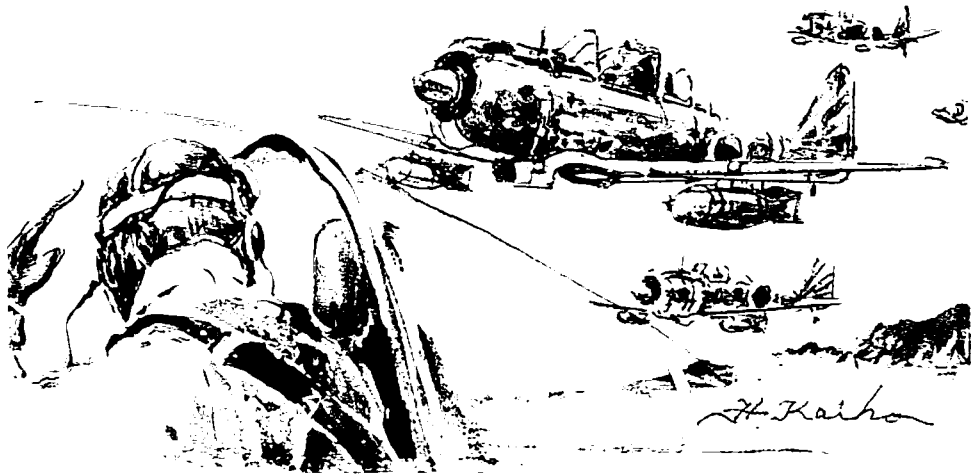
往路は海上スレスレで神経を消耗し、帰途は闇夜の盲飛行、連続六時間、自信も何もあったものではなかった。

過去三カ年間、第一線で随分ひどい戦闘も経て来たが、こんな無茶な命令はなかった。

ショート・カット

高度計は一五〇〇メートルを指した。この辺が手頃だろう。

編隊は上昇をやめて機首を水平にした。あとは巡航速度で単調な然しながら緊迫した前進である。



全機続いているのを確認

少飛会海法画

私は宿題を解決しなければならぬ。出発の際に遅れた一分をどう切りつめるか。速度を増せば事は簡単だが燃料の消耗が無駄が生じて航続距離が問題となる。近道するより外はないのではないか。地上からの無線は聞いていないし、飛び上がってしまえば参謀がどう命令しようとおちちのものだ。

指示されていた台湾北端からの変針を止めて、ずっと早目に宜蘭の沖合で方向転換をやる。機動部隊と遭遇したら、全員海中に突っ込むまでだ。

隊員一同、こんな私のたくらみを知るよしもない。唯、私を信頼し切って飛び続けている。

われわれ特攻隊の轟々たるエンジンのひびきは、東台湾の海边上空に漲っていた。海上は気流が静かで殆ど揺れない。身体には絶えずリズムカルな震動が伝って心強い。私唯一人天地の間じっと浮んで静寂の真只中にある錯覚さえおぼえる。

今日の目的がこんなつらい任務でなければ、どんなにか快哉を叫びたいような空の旅であろう。出発の興奮が醒めて、急に眠気を催した。

特攻機は、私を一心に凝視して編隊を崩すまいと努力しているのに、航路の近道を断固決意してから、私はもう何も考えなくなかった。

今からあれこれ取越苦労しても仕方がないではないか。とにかく自分で決断した通りに飛んでゆこう。今の私にとっては、取りあえず燃料節約の処置をとることであった。

徐々に高空レバーを開いて混合ガスを薄めはじめると、予期してたとはいえ、気筒温度計の指針は見る見る上昇してきたが、この際、エンジンの過熱も止むを得ない。極度にまでガソリンの消費を節約す

ることにした。
左に黒々とそびえる断崖は、われわれと併行して果てしなく続いてゆく。

台湾の高嶺が東海岸までセリ出して来て、そのまま崖となって海に落ちこんでいるのだから、海辺に猫の額の平地すらあり得ない。

南北を通ずる唯一本の交通路は、海上数百メートルの断崖の中腹を羊腸の如く見えかくれに這いまわっている。不便極まる東台湾が文化と隔絶していたのも、もっともなことである。

見おさめ？風景

長い断崖が後ろに去って宜蘭の青々とした平野が眼下に展開し蘇澳の港には小さな機帆船が二、三隻浮んでいるのが望見された。

四番機が少し離れているのに気がついた。
調子が悪いのかな、今なら基地へ単機返すことも出来る。様子を訊ねてみよう。

速度を落して手を振ってたずねたが、大丈夫という合図をうけた。そして彼はしきりに宜蘭の街を感慨深げに見下ろしていた。

さあ、この辺から変針するのだ……いよいよ台湾に背を向けねばならぬ。私は旋回する前になって初めて彼等に予定を変更して、ここから方向を変える旨を伝えた。

彼等は私の一〇分間切りつめの意図が判らなかつたかもしれない。だが、この地点より東へ向うことだけは了解してくれた。

特攻機よ、今のうちだ。娑婆の景色をよく眺めて

おいてくれ……。静かに、おもむろに、編隊は旋回を開始した。

私の羅針盤はゆっくり回転して、沖縄の方を示すとピタリと止った。前方は唯、渺々たる海と空の連なりである。

これから沖縄まで二時間半、何の目印とてなく、コンパスを唯一の頼りとしてゆくのだ。

機首を東に向けてからは、前途に横たわる幾つかの大きな不安が次第に鉛のように私に押しかぶさって来た。まず、敵の機動部隊に捕捉されれば、天運と想ってあきらめるより外はない。

それはさることながら、気懸りなのは全機がこのまま好調で飛び続けてくれるかどうかであった。

一旦飛び上がってしまったえば、特攻機の調子がどうであろうと、私にはどうにも出来ないことだった。一機でも不調になればどうするか。

特攻機の引返しが可能距離であれば、単機帰還を命ずることも出来るし、あるいは再挙を期して全機引返すことも出来る。

だが、航程も半分以上過ぎた場合は、事故機は目をつぶって見捨てる他はなかった。

戦争も末期頃の飛行機は、その粗悪ぶりたるや生命を託して死闘するにはあまりにも程遠いしろものが多かった。過去数年の激戦に耐えぬいて来た私にもこのころの飛行機には、内心ヒクヒクしながら乗っていたものだ。

まして重装備の爆弾搭載にふらふらしながら飛んでいるこの若鷺達の飛行機は、すぐ近くにありながら、向うを眺めるだけで、直接手の届きようがないだけに不安やるかたないものがあつた。

それよりもっと大きな心配があつた。これこそは私の全責任であるが、未だかつて経験したことのない飛行方法で目的地へ進攻することであつた。

それは、米軍の電波探知機に捕えられないために、海上二時間近く超低空飛行で行けという命令である。このような飛行は常識では到底考えられない冒険であつた。完全軍装で一里の道程を匍匐前進しろというようなものであつた。

戦闘機には自動操縦装置などというぜいたくなものはない。瞬時といえども手足を解放することの許されない原始的な操縦機構であつた。

また、超低空ともなれば、ぐっと視野が狭くなつて恐らくは突入少し前に、沖縄の陸地が視野に入ってくる程度であろう。

わずかでも方向が狂えば沖縄からはずれたまま飛びすぎてしまつて、特攻機を大死させねばならない。島影一つない海上を、コンパスの目盛をずらさずに飛ぶ極度の注意集中力が要求される。全く緊張そのものの二時間でなければならぬ。

それを敢えて遂行しうる体力、氣力が我にあるうか。これらの不安が重なり合つて、私の気持は次第に重苦しくなつて来た。

編者注

このあと三週間前に宜蘭に不時着した思出を述べているが、特攻と直接関係ないので割愛し、進航中の続きを次号に続ける。

沖縄中、同北飛行場にまつわる特攻隊の史実

中飛行場（嘉手納）からは、敵が本島に上陸する前に、次の特攻隊が出撃している。

3月27日 武克飛行隊（誠32飛行隊）

広森中尉以下9名

3月28日 赤心飛行隊（現地で編成）

鶴見少尉以下5名

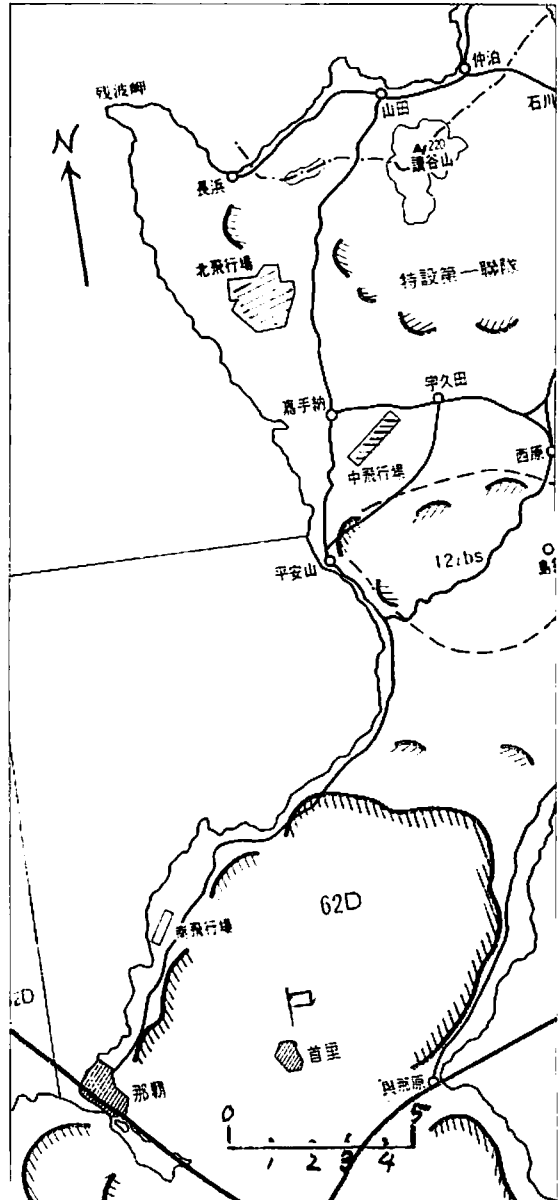
3月29日 扶搖飛行隊（誠41飛行隊）

高祖少尉以下4名

右の三隊は第32軍の航空参謀神中佐の命令によって出撃している。最初の広森中尉以下に出撃を命じたことについて、神参謀が戦後述べたことが、戦史実業書に次の通り載っている。

この特攻攻撃を指揮した神直道中佐は、当時の状況を戦後次のように回想手記している。

私は夕刻艦砲射撃の間隙を縫って飛行場にかけてつた。島尻地区の住民達は延々と国頭地区に向かって避難の道中である。敵機が来ようが長蛇の列は止まらなかった。思いのほか時間がかかる。ふとフランス敗戦時の住民の避難行が軍の行動を妨害した事を想起する。廣森中尉は凜々しい若い飛行将校



である。眼は澄んで態度は誠に落ち着いた。乗って来た単発機は既に整備隊の手によって秘匿整備中である。私は廣森中尉と会談し、操縦時間や訓練度を知った。爆装したことがないという。艦船攻撃について教育を受けたことがないという、その程度の特攻隊であつた。私は特攻戦法そのものに就いて肯定していた。しかしいかなる命令を与うべきかについては、屏東以来考えていながら、まだ判然とした結論が出ていなかった。特攻隊編成についても上司の指令は「特攻」でなく「と」

で艦船撃沈である。死は手段である。命令には必ずしも手段を明示すべきではない。特攻の内容は体当たりであっても体当たりを命令してはならない。その点だけは屏東以来確信していた。通信紙を出して命令を起草した。案外スラスラと筆が運んだ。

八飛神作命第一号

命令

武克飛行隊ハ明二十七日薄明ヲ期シ嘉手納湾ニ游弋スル敵艦艇群ヲ必シ沈スヘシ

命令下達後、離陸時刻、重装備離陸

要領、第一旋回の要領、三機編隊の高度差による対空砲火の分散方法、突撃開始高度、突撃角度、攻撃部位等、詳細にわたり教育した。理解してくれたかどうか実地訓練するわけにも行かぬ。説明が終わると廣森中尉は隊員を集めて話をした。「愈々明朝特攻だ。何時ものように俺について来い。次のことだけはお互に約束しよう。今度生れ変わら、そしてそれが蛆虫であろうと、国を愛する誠心だけは失わないようにしましょう」。それを聞いて私は呼吸が断たれるような衝撃を受け、事実いても立ってもおられなくなった。私は小群

から足ばやにはなれ、とめどもなく流れる感激の、否悲しみの涙をどうすることもできなかった。初年兵教官時代に「忠君愛国」ということを口にはしたことがあった。が、この数年間、忠君も愛国も考えた事は実際なかった。戦争になってからは「憎むべき米軍」

一本槍で通してきた。廣森中尉の一言は深く胸を突き通したようだ。至誠至純そして素直さ。私は恥ずかしくてその若い将校の顔を見るにたえなかった。

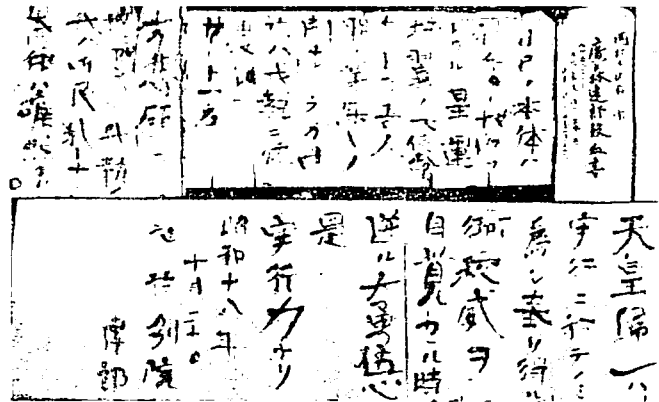
二十七日黎明、牛島軍司令官を案内して首里山上に立った。他の幕僚や兵隊も住民の一部も今朝の特攻を知って遠く観望している。未明である。薄明のあの短い時間を利用しての突撃である。遠く爆音が聞える。私の指示した離陸時刻に寸秒も狂わない。三機又三機次いで又型の崩れた三機が次々と首里山上を過ぎてゆく。大きく西へ旋回すると見るまに嘉手納に接敵する。今までねむっていたように遊弋していた敵の艦砲が、周章でて動き出した。対空火砲が火を噴きはじめた。がもはや間に合わない。隼のように降下する飛行機は吸い込まれるように次々と艦艇に命中する。火炎があたり黒い爆風が艦を蔽う。しばらくして海風が爆風を払うところにはもはや艦艇の姿はなかった。一瞬の静寂。何時の間にか山の彼

方此方に一ぱい立っている兵や住民から一斉にとよめきに似た嘆声がある。熱湯が腹の底から胸へ突き上げて来る。牛島司令官はつと振り向いて「中央へ電文の起案を」そして頭を垂れて瞑目した。

なお、神参謀と同行した参謀部付の西野弘二少佐の手記は、会報49号に載せておいた。参照されたい。次の絵は西野少佐が首里山上で目撃した印象を戦後画いたもの、原本は油絵。



西野画伯



広森中尉の血書

と無線で報告し、未帰還となった。(杉森機の乗員七名は特攻と認定されている。)二二二一隊長機から「只今突入」という無線があり、また同行した第一百戦隊長草刈少佐からは、北飛行場へ四機、中飛行場へ二機、進入コースに入った旨報告があった。阿修羅の如き活躍振りは、当時は敵側の無線傍受によって想像したが、戦後十何年がたつて、米軍の資料が手に入り、義烈空挺隊について次のように記載されていた。

5月24日には、海岸及び沖合の艦船に対する日本軍の来襲は頻繁となった。24日晚、天空は澄み渡り満月で爆撃には最適であった。二〇〇〇空襲警報発令となり、解除になったのは、二四〇〇であった。この間来襲を重ねること七回に及んだ。

第一回来襲の数機は、読谷、嘉手納の飛行場を爆撃し、第三、第四及び第六回目の来襲群も、飛行場に対する投弾に成功した。

北飛行場(読谷)の跡は風化した滑走路が僅かに残っているだけで、往時を偲ぶものは何もない。唯一つ「義烈空挺隊玉砕の地」という木柱が昔を物語っている。そこからは見えないが、この台の西端に立てば、遙かに伸びた残波岬が見える。その上空に第六十戦隊の杉森機が照明弾を二発投下し、それを目標に第三独立飛行隊の各機は進入した筈である。杉森機は先行し

照明弾二発投下

忽ち少くとも八名の完全武装兵がこの機から躍り出て、滑走路に沿って配置してある飛行機に向って、手榴弾及び焼夷弾をもって攻撃した。

このためコールセイアー二機、C-54輸送機四機、及びブライペーティア一機が破壊された。その他二六機(リベレーター爆撃機二、カルカット機三、コルセアー機二機)が損害を被った。

日本軍空挺部隊着陸のため惹起した混乱で、アメリカ兵は戦死二、負傷一八を生じた。二二三八には増援部隊が読谷飛行場に到着し、飛行場勤務部隊を支援し、さらに来襲を予想する空挺部隊に対応する配置について。

この攻撃のため総計三三機の破壊損傷機を出したほか、ドラム缶六〇〇個分即ち七〇〇〇ガロンのガソリンが炎上した。

調査の結果によれば、日本兵一〇名が読谷において戦死し、他の三名は飛行機内に於て対空砲火のため戦死を遂げていた。その他の「突入機」四機には、それぞれ一四名の兵士が搭乗していたが何れも炎上した飛行機内に散乱して発見された。遺体の総数は六九を算した。翌日一名の日本兵が残波岬において射殺されたが、おそらく空挺部隊の最後の兵士であったのだろう。読谷飛行場は、滑走路上に散乱した破

壊物の破片のため、二十五日〇八〇〇まで使用できない状態であった。

読谷飛行場に対する攻撃と同時に、日本軍飛行機二三機が、伊江島飛行場に来襲した。この爆撃は飛行場に対し、直接大損害を与えなかったが、米軍は六〇名の戦死者を出した。

この夜空中攻撃によって、日本軍一機を沖繩地上で、一六機を伊江島上空で撃墜した。また、別の書物には次のように書いてあった。

第五番目の飛行機は、指揮塔から約二五〇フィート、東北から西南に伸びた滑走路に胴体着陸した。約一二名の日本兵が無事着陸し、少数の勇敢な者が、如何なる程度のことのできるかを実際に示した。

飛行場に置いてあった飛行機が、爆薬により破壊され炎上し始めた。コルセアー三機、第一艦隊飛行団の二機及び輸送機四機が破壊され、その他二九機が損傷を受けた。なお七万ガロンのガソリンが燃された。

この日本軍の挺進攻撃によって、想像に絶するような混乱が、基地内に起きた。小銃機関銃火が乱れ飛び、米軍に多数の死傷者を生じた。管制塔勤務のケーレー中尉は負傷後死亡し、他に一八名が負傷した。中には足一本を吹き飛ばさ

れた海兵隊の搭乗員二名を含んでいる。

日本兵は損傷した輸送機に隠れて手榴弾を投げ、これによって一八名のうち四名が負傷した。最後に残った日本兵の一名は、5月25日午後0時55分、道路から藪に這い込もうとしたとき、

米軍に見送られて射殺された。合計六九名の日本兵の死体が数えられ、海軍設営隊の手で埋葬された。捕虜になった者は一名もなく、ある者は自殺した。

日本軍はこの攻撃で飛行機九機を破壊し、二九機に損傷を与え、日本軍の損害はただの五機であった。

もう一つ別の書物には、米軍の混乱振りをおのけように伝えている。

撃墜されなかった一機は、胴体着陸を強行した。そしてその滑走がまだ停止しないうちに、空挺隊員は飛行機から跳出して、手榴弾や爆薬を近くにと

まっている飛行機に投げ始め、さらにその一帯を小火器で掃射しはじめた。この全く信ずることのできない突発事と、それに続く混乱の様様を、くわしく書くことはむづかしい。なぜならその大部分は、話から話に伝ってゆくうちに、真実がわからなくなってしまうからである。

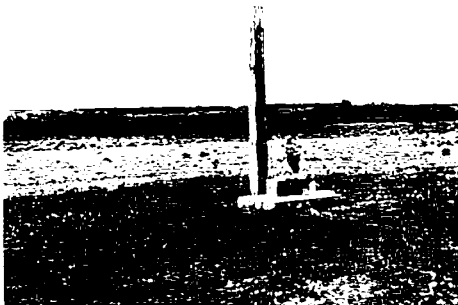
これらの文書が正確であるとすれば、突入に成功したものは余りにも少ない

ことになる。

が、今になってそのような史実をせんさくしても無益なことである。突入に成功した十数名は、全員の精魂を凝集して戦い、そして玉砕したのであろう。



松本武仁画



読谷飛行場跡

〔沖繩巡拝の某〕 義烈空挺隊概説

この部隊は初、サイパンのB-29基地に鉄槌を加えるために創設された特攻隊である。搭乗部隊である奥山隊は、挺進第一聯隊の第四中隊の中隊長以下をもって編成し、人員は奥山道郎大尉以下126名、豊岡に移ってから中野学校

出の将校八名と下士官二名を加え、総員136名だった。中野学校出身者が加えられたのはサイパンに潜伏諜報員を潜入させる為だったが、沖繩作戦に使われた際は、まったくの戦闘員となっていた。編成されたのは19年11月末、じ

来特攻隊の名を負い半年に及ぶ間一名の脱落者もなかった。一方奥山隊を載せて敵地に強行着陸する第三独立飛行隊は、(以下3独飛と略称)19年7月20日の参謀総長指示で、サイパン爆撃の為銚田飛行学校で編成した飛行隊だったが、後に浜松に移り、機種を97重に改編し、人員の入れ替えを行い、奥山隊を載せて行く特攻隊となった。隊長は諏訪部忠一大尉である。

奥山隊は12月初に豊岡に移り、サイパン攻撃の訓練を行い3独飛は浜松に在って練成したが、練成が手間取り、

そのうちに硫黄島中継ができなくなり、サイパン攻撃は取り止めとなった。

その後一時硫黄島攻撃を企図し、準備したが具体化せず、奥山隊は宮崎県の唐瀬原に、3独飛は浜松に在って戦機を覗いていた。そして沖繩作戦の途中、第六航空軍の強い要請により義烈空挺隊が使われることになった。

この作戦の目的

敵が沖繩本島に上陸したのは4月1日。台湾を跳越えて我が内懐に入ってきたので、驕敵を洋上に叩く絶好の態勢であると、陸海軍航空部隊は振い立った。陸軍の第六航空軍、海軍の第五航空艦隊は、特攻を主軸とし敵艦船の撃滅を期した。それが為には沖繩の第三十二軍に対し、島内の飛行場を敵に使わせないことを絶対の要件として期待していた。

ところが第32軍では、その前に一個師団を台湾に引き抜かれているので、持久に適さない読谷、嘉手納地区は放棄してしまった。敵は上陸第一日に北(読谷)、中(嘉手納)両飛行場を占領して、これを修復し4日には戦闘機が進出して来た。

陸海軍航空部隊はこゝを先途と戦い、嘉手納沖に群る敵艦船に対する熾烈な特攻攻撃によって、一時は戦局を逆転

させうるかに見えた。しかし、南九州から島伝いに進攻する我が特攻機は、島内の飛行場を飛立つ敵戦闘機に捕捉され、途中で空しく撃墜されるものがあった。そこで六航空軍では義烈空挺隊を北、

中両飛行場に強行着陸させ一時的にこれを抑え込み、その機を利用して大挙特攻攻撃をかけようと思いついた。義烈空挺隊の使用については、大本營の認可を要すとされていたので、第六航空軍は何回も意見具申し認可を求め、5月2日になって、その準備をするこの許可が出た。そして、正式に認可されたのは17日である。

作戦計画

奥山隊は5月8日に熊本に移動し、健軍飛行場の傍にある三角兵舎に入った。

そこで攻撃計画を練り、判明した情報に基く夜間訓練を行った。北、中両飛行場には三〇〇機位の敵機がいるらしい。サイパンの場合とは違い全部小型機である。それを捻り潰すのは勿論であるが、集積してある弾薬、燃料も爆破拵却して少くとも三昼夜位は飛行場の機能を麻痺させなければならない。

19日に第3独立飛行隊が浜松から到着し、大要次の通り計画が決定した。

- ・北飛行場には八機、奥山隊長指揮中飛行場には四機 渡部大尉指揮
- ・一九二〇健軍飛行場を離陸し、沖繩 本島北方海上に出て超低空で進入し、二三二〇頃両飛行場に強行着陸する
- ・第六十戦隊の一機が残波岬上空に照明弾を投下して、進入目標を指示する。
- ・翌日の朝から陸海軍の特攻全兵力を挙げて沖繩周辺の敵艦船を攻撃する。この攻撃は両飛行場の制圧の続いている間反覆続行する。

サイパン、硫黄島と二回も取り止めになり、約半年間も特攻隊という名を負い続けてきたが、今度こそは実現間違いなしと、今まで何回もやったことではあるが、身辺を整理し、それぞれ遺書を認めた。

決行

5月23日一七〇〇格納庫の前に集合、菅原軍司令官の激励の辞があり、次いで乾盃、万歳三唱、郷里に向い最後の別れを告げて愈々塔乗しようとしたとき先行した重爆から沖繩方面天候不良という電報が入った。

実は昨日まで天候不良だったが、23日は回復する見込みだったので決行に踏み切った。現に熊本地方は快晴であ

り、事前の爆撃に任ずる重爆が目標に向いつつあったが、沖縄近海は霧雨が降っていることを報じて来た。また海軍側からも同様の連絡があった。不運は最後までつき纏っていた。

翌24日、昨日と同様先ず重爆一二機が爆撃に向い、天候良好である旨報告した。

夕陽が金峰山に傾きかける頃、昨日と同じようにもう一度乾盃し、郷里を選擇して、各機ごと二斉に撃留地に向った。カメラマンが先に走って行き何回も写真を撮った。

奥山と諏訪部は搭乗機の前に来たとき、向い合って握手した。

全員搭乗完了。奥山と諏訪部は天蓋を開けて上半身を乗り出し出発の合図をする。飛行機は滑走路の東端に向い滑り出す。

格納庫の前には飛行場にいる全員が並んで帽子を振った。夕陽は金峰山に没し、阿蘇は紫色に映えている。機首を廻らし総ては西の空に消えて行つた。

結末

送り出した陸軍飛行場では、刻々と迫る予定時刻に全神経を集中していた。空挺隊との連絡は、行動を秘匿するため、隊長機の無線で洋上の交進点通過、本島到着、只今突入の三回だけ放送す

ることになっていった。二二〇〇の突入予定時刻になっても、何の音沙汰もなかった。

二二二一になって、俄然「只今突入」の電波が入った。これが最初にして最後の報告となった。同行していた第110戦隊長機からも二二二五になって、

「諏訪部隊成功」と報じて来た。それから更に二九分後、敵の生文通信が乱れ飛んだ「北飛行場異変あり」「在空中機は着陸するな」「島外飛行場を利用せよ」「母艦に着艦せよ」等、蜂の巣を突いたような騒ぎである。

同行した重爆は、北飛行場に四機、中飛行場に二機進入したことを確認しているが、戦後公表された米軍の資料では、結局無事着陸できたのは北飛行場に一機だけとなっている、しかしその一機の搭乗者の奮戦は物凄く25、26の両日は飛行場の使用を完全に封じてしまった。敵が飛行場の使用開始を放

送したのは、27日一〇〇〇である。この機に乗じて大挙特攻攻撃を行う計画であったが、天候不良で敵艦船を発見できたのは一部で、予期した戦果は収め得なかった。世界に類のない特攻戦法をもつてしても、挽回できる戦勢ではなかった。

あゝ義烈空挺隊

一 南陸の空雲荒れて
悲報は引くや櫛のごと
菊水の旗幾度か
わが陣頭に翻り
その名床しき健軍に
出撃の陣整いぬ
われ育みし故郷よ
栄あれ永久にいざさらば

二 人生僅か五十年
下天のうちをくらぶれば
夢まぼろしと人は言う
その半ばにて散るとても
見果てぬ夢に変わりなし
今こそ往かん美しく
後継ぐ人に言伝てて
我に続けや若人よ

三 奥山諏訪部の両雄は
笑をたたえつ手を握り
心に残るくまもなし
今日このために我等皆
春蝶乱の花の日も
秋蕭条の月の夜も
鋭心磨き一すじに
ものものふの道歩み来し

四 金峰山に沈む陽に
うち連れ帰るとも鴉

幼き思い今絶ちて
爆音消ゆる西の果て
雲間に漏るる月三更
奥山ついた、突入す
唯一言の無線にて
永久に絆はと絶えたり

五 北飛行場に異変あり
着陸するな退避せよ
敵の電波は乱れ飛び
阿修羅の如き活躍に
応じて立てり特攻機
若き命は燃ゆるとも
天地懸河の大勢を
止むる術は既になし

六 「待つありて眺むる月の涼しさ」と
詠いし人よ今いづこ
ハイビスカスの花紅く
平和の姿甦る
五十余年のうつろいを
見つめる人の面影は
久遠の若さ保ちあり
若人義烈空挺隊
ああ、義烈空挺隊

待つありて
眺むる月の
涼しさよ
第三独立飛行隊
新妻少尉遺詠

第三独立飛行隊
新妻少尉遺詠

陸軍	二、我義烈空挺隊攻撃計画
二、方針	隊ハX、Y時ヲ期シ我爆撃隊主力ヲ制壓シ
	爆撃ニ着目シ主力ヲ以テ北飛行場一部ヲ
	以テ中飛行場ニ強行着陸シ一帯ニ敵飛行
	基地ヲ撃滅ス。爾後海軍攻撃隊ニ移行シ
	敵飛行基地又後方ヲ攪乱シ全敵ノ殲滅ヲ
	有利ナラシム
	三、攻撃實施
	共ニ第一期攻撃(飛行場周辺地ニ攻撃)
	一、戦闘指導要領
	X、Y時ヲ期シ主力ハ機ヲ以テ北飛行場一部
	四機ヲ以テ中飛行場ニ強行着陸シ(重ト夫ヲ
	在地敵飛行機並ニ軍用品ノ破壊焼却ニ
	邁リ併シ揚陸場附近ニ物資集積所ヲ

陸軍

(上掲実物コピーの続き)

攻撃シ一帯ニ敵飛行基地ヲ撃滅ス

2 北飛行場攻撃隊ハ強行着陸ニ着接シ

重点ヲ在地飛行機ノ破壊ニ置キ併セ

テ敵司令部及同地周辺地区ノ軍用品

集積所ヲ攻撃ス

3 着陸直後有力ナル一部ヲ以テ敵司令

部及通信所ヲ急襲シ高級將校指揮中

枢ヲ崩壊セシム

4 爾後海岸方向ニ戦果ヲ拡張シ揚陸地

点附近ノ物資集積所ヲ攻撃ス

5 中飛行場攻撃隊ハ強行着陸ニ着接シ

重点ヲ在地飛行機破壊ニ置キ併セテ

同地周辺地区・物資集積所ヲ攻撃シ

爾後海岸方向ニ戦果ヲ拡張セシム

6 予定滑走路以外ニ着陸セル場合ニ於

テモ速ニ担任地域ニ至リ任務完遂ニ

努ムベシ

7 目的達成セバ我方爆撃隊ノ制圧爆撃

下一斉ニ戰場ヲ離脱シ北飛行場東北

方△湖東側谷地ニ集結シ第二期攻撃

(遊撃戦闘)ヲ準備ス

離脱時期ハX日Y時ト予定シ青吊屋

ヲ併用ス

8 3部ハ搭乗機毎ニ一組トナリ各部隊ト

共ニ戦闘セシム

計画書は続いて軍隊区分、両攻撃隊

の戦闘指導要領、編成装備、通信連絡

給養、衛生などについて詳細に記述さ

れており、無事着陸できたら大戦果を

挙げていたであろう。

健軍飛行場出撃前から小柳次一とい
うカメラマンが沢山の写真を撮り、現
存している。この人は既に故人である
が、生前は慰霊祭には必ず出席し往時
を語った。

左記の写真について、部隊が搭乗機
に向うとき隊員の表情を撮ろうと走っ
ていて、ふと振り向くと奥山隊長と諏
訪部隊長が握手している。慌てて、撮
ろうとしたが終ってしまった。やむを得
ず「もう一度お願いします」と言った
ところ、奥山曰く「干面役者は忙しい
ナー」と、そこで皆が笑っているのだと。



沖繩摩文仁台上

義烈の碑 建碑の由来

発端

田中賢一

昭和50年4月頃だったか、既に故人となつたが、弓削正氏から次のような依頼を受けた。

沖繩に義烈の顕彰碑を建てたい。自分は横須賀で製パン工場を経営しており、手が放せないから私に委員長となつてやってくれとて、準備資金として五〇万円を差出した。

この人は私より2年先輩の50期、挺進部隊では15年末に所属となつた十数名の研究員の中の一人だった。翌16年になって練習員の教育が始り、一応降下訓練の終わった者をもって教導挺進第一聯隊を編成したが、弓削大尉は工兵出身なので第四中隊長となつた。この中隊長は工兵の機能を備えることになつてた。奥山道郎中尉(53期)も工兵出身なので初めからこの中隊長だった。18年6月弓削大尉は聯隊本部付となり、奥山中尉が替つて中隊長となつた。二人はそのような深い係りがあった。

その頃空挺同志会はまだ理事制はできておらず、発足以来何人かの世話人

がいるだけで、会の業務はすべて自衛隊空挺団本部の広報班任せだった。ところがこれでは対外的にも具合が悪いということで、世話人が協議しせめて会長だけでもきめようと、私は当時衆議院副議長だった園田代議士を訪ね、会長を引受けてもらった。そして世話人に押されて私が副会長ということになった。園田直氏は幹部候補生出身の将校で、奥山大尉が第四中隊長になつた当時第二中隊長だった。

資金調達

引き受けざるを得なくなつた私は、先ず会長に報告しておかねばならぬと、衆議院議員会館に向き話をした。園田直会長は終戦により実現しなかつたサイパン空挺特攻の隊長でもあつたので、大そう乗気になって、先立つものは資金だ、意気に感ずれば金を出す人がいる、話してみようということになつた。

それから何日後だったが、金を出してくれる人がいるから、何日何時に何かホテルに来いという電話が、園田会長からかかって来たので出向いた。那覇で病院を経営している大浜方栄という人だった。話は園田先生から聞いていると、その場で二百万円の小切手

をくれた。熊本の医学生の頃園田先生の世話になったというようなことを手短かに話された。弓削氏の五十万円といふ大浜氏の二百万といふ、昭和50年のことだから今の金にすればその倍以上になろうか。

このようにして資金調達の初動はつき、あとは戦友からの募金ということになったが、それは建設計画が固まらないとできないので、後まわしにした。最終的に挺進第一聯隊の会員を主体として、自衛隊関係の会員も含めて約一四〇〇名から一、一〇〇万円を集めることができた。

建設計画と建碑の経過

空挺同志会の世話人に不時着生残りの人を加え建碑の委員会を作つた。会計をはじめ事務一切の取り仕切りは、広報班の二塚班長が引受けてくれた。私は建碑の場所を決める為沖繩に出向いた。義烈生残りの和田委員と二塚班長が同行した。先ず読谷飛行場跡に行つてみた。そこには和田氏ら義烈生残り人達が先年建てた慰霊の本柱があつた。和田氏は奥山隊長以下の魂が籠っている此所に建てることを主張した。

私は後世に語り伝える為にはこんな辺鄙な処では駄目だと反対して摩文仁の

台上に行つてみた。私は沖繩がまだ米国の施政下にある頃、建設工事で嘉手納付近で働いたことがあるので、若干土地勘があつた。

摩文仁に行つてみると各県の慰霊碑が立ち並んでおり、県か市で統制したのである。その列は整然としていたが、まだ統一した造園はなされていなかった。それらの土地は私有地を買取つて建碑したのだという。ある人から入手した情報で、翼友会(陸海軍航空に所属し現在沖繩に移住している人の団体)が山頂部に土地を持っており、翼友会の建てた「空華の塔」は台端に南向きに建つていて、その北側があき地になつていて、と聞いた。

検討してみると百坪余のあき地があり、将来この地域一帯の造園が行われると、二本ある参道の合流点で一番目立つ処と思ひ、翼友会事務局長の浜松昭氏に会い、譲渡を依頼した。その時は確答を得られなかったが、見込みありと感触を得て帰つた。

建設場所の目算がついたので、委員会を開いて碑のデザインについて協議した。その時誰の発案か忘れたが、碑の石は熊本健軍飛行場の西に聳える金峯山から出したらよいという意見が出た。そこで空挺同志会の源川熊本支部長等が現地に出向き、金峯山近く

の石屋の集積場でこの石を選定し買付けた。そして源川氏の尽力で海上自衛隊がこの石を那覇港まで運搬してくれることになった。

また碑に刻む文字は奥山隊長の遺書にある「義烈」の二字ときまされた。副碑の文章(後記)は私が起草し、これも委員会の賛同を得た。募金の方も順調に集まりつつあり、翼友会からは百二十万円で分譲の承諾を得たので、工事を誰にやらしてもらおうか決める為、私は再度現地に向かい出した。

地元が一番大きい業者は園場組である。園場組に行って社長(或いは会長だったかもしれぬ)の園場幸太郎氏に会って、那覇港から石を運び、文字を彫り、碑を建て、造園まで一切を委託した。事前に文書で頼んであったと記憶するが、初めての対面だった。いくらかかるかという私の間に、会社の者に積算させたら四百万といっているところなので、私はその位はかかるだろうなとは思ったが、実は二百万しか予算がないのだと言った。すると老人は「このことは只でもやらねばならぬ」と思っている、二百万で結構です」と即座に答えた。そこで私は、我々は園場組に四百万払い園場組は我が会に二百万寄付したということにしたらどうかと提案すると、「そんな有難いことは

ない」と涙を流さんばかりに喜び、私の手を固く握った。この人は敵が上陸して来たときは、軍の工事で熊本にいたので今日があるのだ。義烈空挺隊のようには沖繩を守るため死んだ人の為なら、我々は何でもやらねばならぬ、というような話をして泡盛を酌み交わした。碑の設置、造園など現況は当時園場組の施工そのままである。副碑の銅板は東京で作られ設置だけを園場組が行った。なお銅板の文字は当時空挺教育隊に勤務していた西岡郁雄氏の揮毫である。

除幕式

このようにして碑は完成した。昭和51年5月24日の午後、園田会長以下戦友・遺族・現職空挺隊員、それに地元有力者・建設会社等合わせて四百名近い者が参列して、盛大な除幕式が行われた。

その日の午前、県外から来たものを主体として約二百名が、バスを連ねて読谷飛行場跡を訪れた。それらのことについて私がその年に出した。「帰らぬ空挺部隊」という本には次のように書いておいた。

「昭和五十一年五月二十四日——その日は突人から三十一年目に当る——、

義烈空挺隊の遺族五十余名、落下傘部隊の戦友約百名、それに自衛隊の空挺隊員約五十名は沖繩の北飛行場跡を訪れた。

島の南端摩文仁の丘に義烈空挺隊の慰霊碑が完成し、当日午後はその除幕式を実施することになっていた。北飛行場跡はまだ米軍の管理下にあって、コンクリートの滑走路は風化して雑草生い繁り、荒れ果てたままになっている。

不時着して生き残った一戦友が、往時を回顧しつつ説明した。

——計画ではこの方向から進入して、この滑走路に着陸することになっていました。着陸に成功した飛行機は、多分この辺に停止し、滑走路に沿って並んでいた敵機に襲いかかったのだらうと思います。

遺族も戦友たちも、食い入るように滑走路の跡をみつめている。

暗黒の飛行場を脱兎の如く走る将兵、天を劈く爆発音、炎々と燃え上がる敵機。眼を閉じれば、往時の光景が迫り来る。

誘導機が照明弾を投下したという残波岬の方向に、珊瑚礁で美しい海岸が湾曲して伸びている。あの紺碧の洋上に、ひしめき合っている敵艦船に向い、我が特攻機は真一文字に突込んで行っ

たのだらう。台端にある民家の庭に咲くハイビスカスの紅は、流した血汐によって彩られているのかもしれない。一人の中年の婦人が、付添の若い自衛隊員に語りかけた。

「お蔭様で兄が戦死した場所を弔うことができました。遺骨の代りに紐の切れた靴と落下傘の紐が届けられました。今日はこの土を遺骨の代りにもって帰ります。

兄は戦死したとき確か二十三歳でしたが、貴方方と同じ位ではないでしょうか」

「僕も二十三才ですが、昔の人は偉かったですね。自分にそんなことができるのだらうか」

「私の息子も同じ年です。息子を見ると時々兄のことを思い出します。兄が休暇をもらって帰省したのは、四月の二十九日でした。その時落下傘降下の話をしてくれましたが、特攻隊になっていることなどは少しも言いませんでした。一晩母と三人、父の仏壇の前に枕を並べて寝ました。翌朝村外れまで見送って別れましたが、それが最後でした。一ヶ月後義烈空挺隊のことが大きく新聞に出て、間もなく兄の戦死公報が届きました。」

この婦人の言う兄とは、金山清軍曹のことだった。

話を聞いた自衛隊員は、二十三歳ということに強く心を打たれた。』

固定資産税の問題

翼友会から買った敷地は、当方が法人になっていないので会の名前では登記できない。土地は三筆に分れていたのでも中心部が一番大きいところを私の名義で、そのほかの二箇所を弓削忠、寺田作司の名前で登記した。

ところが昭和62年になって、私のところへ糸満市役所から固定資産税の納税通知所が届いた。宛名は田中賢一外二名で、税額は二、三三〇円となっている。そこで私は糸満市長宛に手紙を出した。この位の金は供養と思つて納めてもよいが、私が死んだら滞納するだろう、どうしても税金を取るといふのなら、あの土地を市に寄付してもよいが、市有地になったら借地料をよこせと言われても困る、というようなことを書いた。すると、今までは手作業で納税通知書を作成していたが、今度コンピュータに入力して作成したので、通知が出てしまった。慰霊碑の土地に課税する考えはない、という返事がきて一件落着した。

沖繩県慰霊協会分担金納入の件

固定資産税の一件があった頃のことだが、摩文仁慰霊公園一帯を管理する財団法人の慰霊協会から、分担金の請求が来た。建碑の頃にはそのような組織があるとは知らなかった。後からそのようなものを作って金を請求するのは怪しからんと、黙殺しようかと思つたが、除草、清掃、植木の手入れなど一切やるというので無視できぬと思つた。空挺同志会沖繩支部が年に何回かやってくれるが、我々の碑の前の広場に休憩所ができ、我が方の境内に弁当ガラが舞込んでいたことがあったと聞いたので、この協会に頼んだ方がよからうと思ひ、取り敢えず年会費八万円だったか支払った。その頃余り金でその位事務局にあった。然し早晚財源がなくなるのは日に見えているので、私は現地に出向き、当時県議員だった桑江良逢氏に立合ってもらい協会の理事に会った。桑江氏は55期で初代の沖繩混成団長、私とは知己の人だった。私は年会費をやめて終身会費的な取扱いはできぬかと言つた。各県は毎年納めてくれるが「ダバオの塔」(義烈の隣にある)から同じような申出があったので、坪一万円という計算で一括納入してもらつた。義烈は二百坪あるか

ら二百万円納めてくれ、という。私は登記上の面積は覚えていなかったが、二百坪もあるとは思えないので、自衛隊に頼んで境内のような処を表測してもらつた。向かつて右の方の境界は判然としなが二百二、三十坪と出た。そこで再度掛合つたところ、先方が持っている図面は海に向かう急斜面まで含んでいことがわかつた。私はそんなところは管理してくれなくてもよいのだと、いろいろと交渉した結果百五十万円ということになった。

さて沖繩から帰つてその金を整える為再度募金にかかった。当時私は借行社の事務局長をしていたので、義烈空挺隊に名を連ねている将校の同期生会に働きかけた。因みにその同期生会とは次の通りである。

- 53 期 奥山道郎
- 54 期 諏訪部忠一
- 55 期 渡部利夫
- 56 期 町田一郎
- 57 期 川守田啓志・小林眞吾
新妻幸雄・荒谷 猛

- 少22期 久野正信
- 酒井義男

奥山・渡部以外は第三独立飛行隊。その項は私の著書「帰らぬ空挺部隊」がまだ出版元に残つていたので、買取つて各期に一冊づつ贈つて理解を求めた

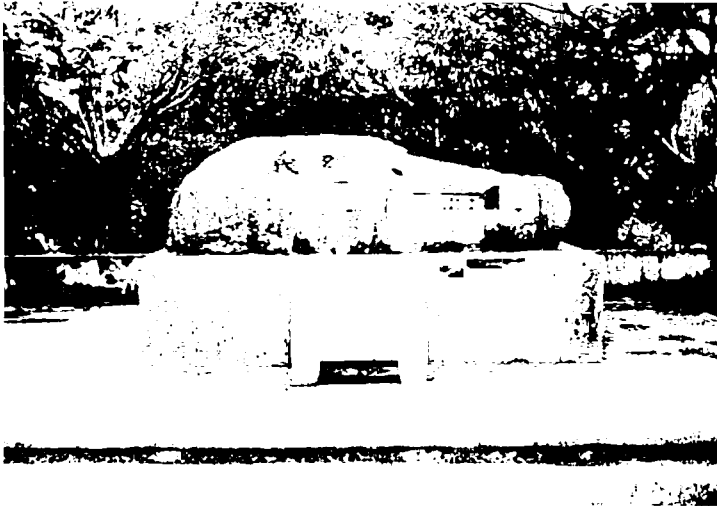
ところ、喜んで醸金してくれた。特に奥山隊長の53期は、同期会だけでなく、工兵一同とか、幼年学校出身一同とか、更にはフランス語班などいくつものグループの名で寄附金が集り、奥山君の人徳がここまで及んでいるのに驚いた。もちろん空挺同志会の有志も醸金し、目標額を突破して沖繩慰霊協会へ納めることができた。

(碑文)

義烈空挺隊讚

秋ソレ昭和二十年五月二十四日夜
 敗色既ニ濃キ沖繩戦場読谷飛行場ニ
 突如強行着陸セル敵機ノ爆撃機アリ
 該機ヨリ躍リ出タル決死ノ將兵ハ飛行
 場ニ在リシ多数ノ敵機オヨビ燃料弾薬
 ヲ爆碎シ混乱ノ巷ト化セシメタリ為ニ
 飛行場ノ機能喪失スルコト三日間ニ
 及ビソノ間我方航空特攻機ハ敵艦船
 ニ対シ至大ノ戦果ヲ収メルヲ得タリ
 コレ我方挺進第一聯隊ヨリ選出セ
 ラレタル義烈空挺隊及ビ第三独立飛
 行隊ノ壮挙ニシテ両隊將兵百十三名
 全員ココニ悠久ノ大義ニ殉ゼリ
 後ニ続ク者ヲ信ジ日本民族守護ノ
 礎石トナリシ將兵ノ靈ニ我等何ヲモ
 ッテ応エントスルヤ

昭和五十一年五月二十四日
全日本空挺同志会



この碑に刻んである「義烈」の文字は、奥山隊長が母に宛てた遺書にある字を拡大して刻んだものである。



遺書

昭和五年五月二十一日

此の度義烈空挺隊隊長と担任中垣の守りと敵航空基地に突撃致し、絶好の死場所を得た私は日本一の幸福者であります。只感謝感激外ありません。幼年學びた教員業十二年諸上司の御訓誡も今日の為の糧に思ひます。心成以て御恩の萬分の一に報ゆる覚悟であります。拝頼即別不申事とせんでした。道郎は喜びます。人にて。昭和六年親不存。と深く即詫びます。母上様 道郎



この墨書の現物は習志野自衛隊空挺館に展示してある。



この境内にはもう一つ奥山隊長の筆跡が掲げられている。「挺進殉国」と書いている写真とその墨書が現存しているので、それを金属板に再現し石に嵌め込み設置してある。



沖繩戦における震洋

震洋会事務局

上田 恵之助

沖繩にはニコ部隊の震洋隊が派遣され、海軍沖繩方面根拠地隊太田実少将の指揮下に入った。第二十二震洋隊は昭和19年10月末川棚臨時魚雷艇訓練所で編成され、沖繩本島の金武に進出したのは翌20年1月26日であった。

3月14日、金武湾で訓練中B-24爆撃機の急襲をうけ、先任将校藤本中尉以下一八名が戦死、訓練中の震洋艇一隻を失った。

第四十二震洋隊は二隊に分かれて佐世保を出発した。先遣隊が2月末沖繩本島に到着、金武湾に面した屋嘉が基地に当てられた。後続隊は3月1日輸送船慶山丸(二、一六屯)で、佐世保を出港したが、10日〇七〇〇北緯29度23分東経128度13分の地点に於て敵潜水艦の雷撃を四番艦にうけ、三〇隻の震洋艇と多数の隊員が海没した。

米軍は3月26日、優良間諸島に上陸を開始、ここに前進基地をつくった。翌27日沖繩方面根拠地隊司令部は、第二十二震洋隊並びに第四十二震洋隊に対し、中城湾沖の敵艦船攻撃の為に各隊六隻の出撃命令を出した。第二十二

震洋隊は一隻が機関不調で出撃出来ず二隻が目的の海域に向って出撃した。中城湾沖に到着して搜索したが敵艦船を発見出来ず、両隊とも全艇掃射した。

3月29日夕刻、二回目の出撃命令が第四十二震洋隊に下った。部隊長井本中尉は残艇約一個艇隊を率いて中城湾方面に向け出撃した。しかし井本部隊は会敵出来ず沖繩本島南部に上陸、沖繩方面根拠地隊に合流して地上戦に加わり、部隊長はじめ隊員の半ばが戦死した。

3月30日夜になって、前夜出撃した第四十二震洋隊の一隻が機関故障で金武基地に掃射した。その途中中城湾沖合いに敵艦船を確認したとの情報を得たので、第二十二震洋隊部隊長豊広中尉は独断で一個艇隊の出撃を決心した。第四艇隊長中川兵曹長が志願して艇隊を指揮出撃したが、31日夜明艇隊は会敵出来ず掃射した。艇の繫留を終わらした頃、敵機の空襲により掃射艇は全艇が爆砕し陸上の八隻も誘爆焼失した。

4月1日米軍が沖繩本島に上陸を開始した。3日には第二十二震洋隊は一個艇隊を出撃させ、湊川沖の敵輸送船団を攻撃せよとの出撃命令を受けた。しかし連日の空襲で誘道路は損傷し、運搬車の自由がきかず、五隻を浮かべ得たのみであった。一艇には二人の搭

乗員が乗り込んだ。部隊長豊広中尉の指揮官艇と四隻の攻撃艇は南に向かつて発進した。

伊計島に近付く頃、後続艇のうち二隻が機関故障で脱落し、湾外出たのは三隻であった。4日午前2時頃駆逐艦らしき艦影を発見、後続二艇が攻撃命令を受け発進した。しかし敵は高速で航走している軍艦であり、震洋艇は二人乗りで十分な速力が出せず、一艇は敵艦を逃してしまつたが、市川正吉二等飛行兵曹と鈴木音松二等飛行兵曹の艇は体当たりで成功した。連合軍の公式記録では歩兵揚陸艇第八二号一隻沈没となっている。敵艦を逃した艇は攻撃を断念し金武岬北方に上陸部隊した。

指揮官は残存艇を率いて再出撃すべく、金武に掃射したが、基地は敵上陸軍の砲撃を受け、基地隊員の一部は陸軍と合流すべく基地を離れ、艇の浮泛は不可能な為攻撃を断念、4月4日基地を破壊して陸上戦闘に移行した。



震洋

戦史叢書「海軍沖繩作戦」抜

震洋隊 (第二十二震洋隊 指揮官 海軍大尉豊広中尉)
第四十二震洋隊 指揮官 海軍中尉井本元親

第二十二震洋隊は20年1月沖繩に進出当初、四五隻であった。第四十二震洋隊は途中海没に遭い20年3月沖繩に進出した時は一七隻であった。前者は與奈原、後者は金武付近に配備された。3月28日の空襲で四隻を喪失して合計五八隻となった。

同日第二十二震洋隊の五隻と第四十二震洋隊の六隻が協同出撃したが、会敵しなかった。第四十二震洋隊は29日夜一五隻出撃したが、事故や故障座礁などで分離して戦果をあげ得ず30日朝四隻掃射した。その直後空襲に遭って全艇沈没し残艇二隻となったが、これも4月3日と13日に沈没した。第二十二震洋隊は31日被爆により一六隻焼失、4月1日、湊川沖の輸送艦攻撃に出撃したが会敵せず、戦果なく三隻行方不明となった。3日、第二十二震洋隊の一、二隻は金武湾外の艦艇攻撃に出撃、駆逐艦一隻を轟沈した。4日、米軍の進行が早く基地が危くなったので残艇一〇隻と基地を処分し第四十二、第二十二震洋隊は共に以後陸戦に移行した。

(沖繩巡洋の棗)

渡嘉敷と海上挺進戦隊

沖繩での渡嘉敷の位置

慶良間列島は、沖繩那覇市の西方約30〜40軒に所在する諸島で、そのうち渡嘉敷島は最も本島寄りの濃緑の山と紺碧の海に囲まれた村で、その海はエーゲ海と並ぶ透明度を誇っている。島は南北16軒東西4軒に及び島最高の赤間山は20米の展望のよい山で、戦後一時米軍のホーク陣地が置かれ、現在は国立青年の家となっている。

村はかつて鰹節で栄え、遠く南洋迄鰹漁に出掛け、それが村財政を支え、一方広い視野に富んだ教育熱心な村である。

戦隊の渡嘉敷への配置

米攻撃軍の沖繩進攻を予想するとき、配置から見て、慶良間諸島の軍事的意義は大きく、とくに敵の予想上陸正面が、沖繩本島南部湊川正面、糸満および天久正面、本島中部嘉手納正面に限られることから、その側背を特攻攻撃するには、最も好適の位置であり、軍が此所を選択したのは当然のことであった。

19年9月、相前後して第一〜第三戦隊が慶良間に展開し、渡嘉敷に第三戦

隊が配置された。

当時の島民の感情は、サイパン戦や硫黄島の戦いの報道に接しており、軍の島への配置を心強く感じ、心から歓迎するものがあった。したがって、防衛隊は勿論村民・児童に到る迄、軍のための労役に積極的の奉仕を実施した。

戦闘の開始

20年3月23日正午の昼食時に突如米艦載戦闘機の急襲攻撃をうけ、瞬く間に仮設の隊舎は炎上し、村落も日没までにほとんど全滅し、全島到るところ山火事を発生し、敵の進攻も間近に迫ったと実感された。

翌24日も、前日に比し攻撃は激化し、常時50〜60機が在空し、焼夷弾を交えて銃爆撃をつづけた。

戦隊は、軍司令部に情勢の判断を求めたが、軍からは甲号戦備に準じて行動するよう下令された。

25日は、早朝から空中攻撃に加えて猛烈な艦砲射撃を開始した。戦隊長は部隊を退避壕に入れ損害の軽減につとめ又不時の敵上陸に備えて、要点に勤務隊をもって警戒哨を配置し、軍司令部に状況を報告し処置を求めた。

軍からは、敵情判断不明、状況有利ならざるときは糸満附近に転進せよと

命じた。戦隊長は、本島転進を決意し、

二二〇〇頃乏水を下令したが、勤務隊は殆んどが戦闘配備についており又特設水上勤務隊は雲散して掌握が困難となり、その上乏水用の棧や木製レールも殆んど破壊され、乏水は甚だ遅滞した。又阿波連に配置した中隊は、湾口を閉塞する敵のため乏水作業は困難であった。

このとき、戦隊の戦備状況視察中の軍船舶団長大町茂大佐が、対岸の阿嘉島からクリ舟によって到着、軍の命令を知らず乏水の中止を命じたがすぐに再乏水を命じた。

船舶団長は、此の状況で一刻も早く軍司令部に戻り、全船舶部隊の指揮をとる必要を考え、敵海面突破帰還を提案した。

戦隊長は、一緒に協議していた皆本中隊に、特攻艇三一隻をもって団長を護送することを持ち出した。皆本中隊長は此の期に及んで、転進はない、当面の敵に突入するのみだと回答したために団長は決心を再考し、戦隊全部の転進を決意した。

しかし、時既に午前4時を過ぎ、敵の航空攻撃がはじまり、ここで同種部隊の作戦行動秘匿のため白沈するに到った。

悲劇の発生

大町船舶団長は、再度軍司令部への帰還を考え協議した。去る日露戦争のとき、バルチック艦隊の接近をクリ舟を根限り操り八重山の電報局に届けた沖繩漁師の伝統をもつ村民にはかったが、全島舟艇はすべて破壊焼盡つくされていった。ただ皆本中隊には、こっそり自沈せず秘匿した二艇があり、この二艇に分乗して船舶団長と随員が26日夜渡嘉志久湾を発進したが、二番艇は島の北端で浸水し乗員は島に戻り、中島少尉の操縦する団長艇は前進を続けたが洋上で消息を断った。

戦隊長は、一部を残置し警戒にあたらせ主力は復郭陣地への後退を命じた。27日〇九〇〇頃猛烈な砲爆撃の支援下に、渡嘉志久と阿波連に米軍が上陸攻撃を開始した。皆本中隊長は配属の高塚勤務小隊を指揮し渡嘉志久東方台上で敵の前進を阻止したが、交戦約三〇分で小隊長以下多数の戦死者を出し、小隊長に代り直接指揮をとり戦闘をつづけ28日一〇〇〇頃本隊に復帰した。

米軍は、一〇〇〇頃から復郭陣地に攻撃を加えまた住民避難地区にも砲火を浴びせて来た。住民はおし迫る危機にサイパン住民の強い印象があり、悲壮な決意のもと皇国の必勝を信じ集団自決を遂げ、その数は二六八名に及ん



神話の背景」 沖縄・渡嘉敷の集団自決 で正した。

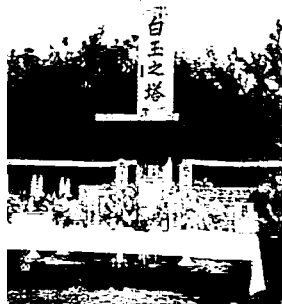
軍民合同の慰霊祭

渡嘉敷村は、尊くも戦いに散華された方々および戦闘で戦死した戦隊員の合同の慰霊祭を、終戦の翌年から毎年島民集団自決の日・3月28日に実施し、七周忌には白玉の塔を建立し慰霊祭を行った。その後米軍のミサイル・ホークのサイトが建設されるにおよび、現在の地に移設され今日に到っている。

この慰霊祭には、毎年戦隊から代表者が参列し、また主要な結節の年にはご遺族および戦友会員多数が全国から馳せ参じている。

この島は、素晴らしい伝統をもつ村であり、あの悲しい戦争を経たが、日本古来の淳風美俗は脈々として現存している。

あるとき、曾野綾子さんから、慰霊祭にと、次のような便りをもらった。



「私は参上できませんお許し下さいませ。お花を、とは思いましたが、数日で見られるものではなく、村の図書館に一冊の本を寄贈いたします、『マサダ』という本ですが、それは紀元七十二二年、死海のほとりでおきたユダヤ人たちの抵抗自決の経過を記したものです。書店から一冊送ってもらいますからお目をお通し頂けるといいと存じます。私渡嘉敷の方々に捧げる言葉を代りに言ってくれているものと思っております。」

戦跡碑

昭和51年3月、海上挺進第三戦隊および海上挺進基地大隊関係者によって戦跡碑を建立し、曾野綾子氏に撰をおねがいました。

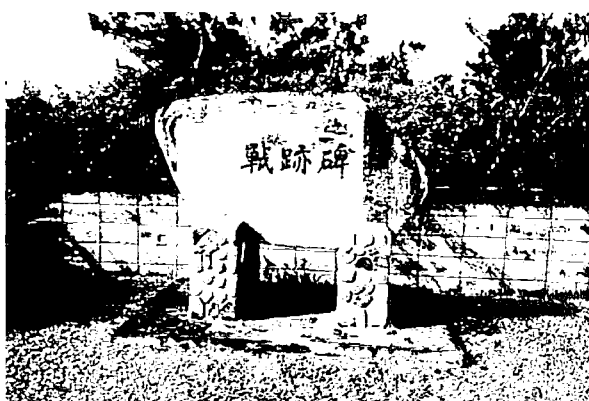
記

ここに記すのは、昭和二十年(一九四五年)この島に於て戦われた激しい戦闘と、島民の死の歴史である。大東亜戦争の最後の年の三月、十三日より、この渡嘉敷島は、米軍機の執拗な空爆と、機動部隊艦艇からの艦砲射撃にさらされた。

山は燃え続け、煙は島を包んだ。当時、島にあったベニヤ板張りの舟を利用した、夜間攻撃用の特攻舟艇部隊は、出撃不可能となり、艇を自らの手によ

て自沈するようにとの命令を受けた。こうして、当時、島にあった海上挺進第三戦隊、同基地隊などの将兵・軍人三一五名は、僅かな火器を持っただけで、島の守備隊とならざるを得なかった。

三月二十七日、豪雨の中を、米軍の攻撃に追いつめられた島の住民たちは、恩納河原ほか数か所に集結したが、翌二十八日、敵の手にかかるよりは自らの手で自決する道を選んだ。一家は或いは車座になって手榴弾を抜き、或いは力ある父や兄が弱い母や妹の生命を断った。そこにあるのは愛であった。



曾野綾子氏による事実の解明 渡嘉敷島民の自決は、戦後流行の風潮に乗り、赤松戦隊長の玉碎命令に基づいたと流布され、真実が歪められた。曾野綾子氏はある日、戦友会の会合に出席、関係者の真情を吐露した発言に感ずるものを認め、二ヶ年に亘り現地の人々から真実の声を聞き取り「ある

だ。

米軍は、沖縄本島および伊江島への上陸のため30日に島から撤退し、その後再度上陸し攻撃したが、戦力を本島に集中しており、真面目な猛攻がない儘終戦に及んだ。

援する基地大隊が昼夜兼行で工事に着手したが、19年12月の第九師団の他方面への転用に伴ない、それぞれ戦隊の作戦に必要とする少数の勤務隊と整備中隊を戦隊長の指揮下に入れ、残余は歩兵戦團に任ずる独立大隊に編成し、師団及び混成旅団へ配属した。特攻艇の泛水作業のためには、朝鮮人軍夫によって編成された特設水上勤務隊が戦隊に配属されたが、掩壕の構築能力は格段に低下しました地上戦闘能力は殆んど消滅した。

防衛態勢の不備

約千名に及ぶ基地大隊の転用に伴い、沖繩本島から離れている慶良間の三個戦隊の特攻基地の防衛態勢は、勤務隊一七〇名と整備中隊六〇名のみで、保有する装備は重機二、軽機六、擲弾筒七他は小銃のみで火砲は無く、戦闘陣地は構築の暇なく敵の上陸を迎えた。

想えば、沖繩進攻の米軍は、大型空母一〇隻、小型空母八隻、護衛空母一八隻、戦艦二八隻、巡洋艦二三隻を含む一三〇〇隻、航空機一七〇〇機に支えられた二四万の兵力を有する米第十軍(防衛研究所資料)の攻撃の前には、その前哨戦の慶良間の戦隊は、特に螻蛄の斧に等しかったと史料する。

海上特攻の艇の操艇上の問題

①艇の研究開発の当初から関与していたが、沖繩周辺は瀬戸内とは海象気象が大きく異なっており、とくに関係が深いのは、うねりと風波の影響である。②の中隊長は三〇隻の艇を指揮して戦闘行動を行うものであるが、夜間夜光虫の光る海面で、大きなうねりに乗り戦闘指揮をとることは困難である。勿論無線の装備はなく、現地において火光信号のランプを艇尾に装置して、指揮を試みたが、うねりに消され受信する側は支離滅裂となった。また魚雷艇等の高速艇の航跡に対する凌波性は、根本的欠陥があり困難をきわめた。

沖繩における①戦隊の戦果

既述のとおり、海上戦力の圧倒的な劣勢のもと、無防備の艇を、困難な戦況の中で駆使して少からざる戦果をあげた。この戦果の確認は、航空戦闘と異り、それを把握することは至難のことであった。

ここに各隊によって纏められている戦果についてのべる。

第二戦隊

3月28日未明、第一中隊長大下眞男少尉(陸士57期)以下一六名が①艇四隻

で出撃、慶良間海峡で米駆逐艦二隻を攻撃したが、敵艦艇により撃破され、被害を与えることはできなかった。

第二十九戦隊

3月29日、第一中隊長中川康敏中尉(陸士56期)以下一七名が、一七隻の①艇で北谷西方の米艦船を攻撃、中型艦一隻を撃沈二隻を撃破した。しかも中隊長以下一六名が戦死した。米軍の資料にも、①艇は激しい砲撃で接近出来ない状況の中、一隻が砲火を突破し五二〇噸のLSM12に突入、艇は中央に大穴をあけられ、應急処置をしたが、4月4日沈没したと記録している。

第二十六戦隊

4月7日(米軍資料では4月9日)船舶工兵第二十六聯隊の神山島(那覇西方約十軒慶伊瀬環礁中の島)の米軍重砲陣地への斬込みに呼応し、第一中隊長富田順行中尉(陸士56期)指揮の①艇(隻数不詳)および第三中隊長岸本具郎少尉(陸士57期)以下二隻が出撃し、

駆逐艦一隻輸送船一隻を撃沈しそのほか火柱三が見えられた。米軍資料では、4月9日3時、①隊は基地より暗夜を

ついて出撃、4時一〇五〇噸の駆逐艦チャールズ・J・バッジャーは①艇の攻撃で機関室に大浸水が起り、艦は

浮力を保てなくなり慶良間海峡まで曳航擲座し戦列から離れ、駆逐艦パアディは被害を免がれたが、六三一八噸の攻撃輸送艦スターも至近爆中をうけた。

岸本中隊長と行動を共にした無漏田敏信少尉(幹候11期)は、山口泉田布施町の眞宗のお寺の息であるが、東京帝大印度哲学を卒えた秀才で、砲弾炸裂する中、正信偈を独唱した後、中隊長とともに駆逐艦に突入した、戦友から賞賛されている。

4月15日、戦隊長足立睦生大尉(陸士53期)は、二二隻を率い嘉手納西方海面の敵艦艇を攻撃、駆逐艦一艦種不詳一を撃沈、艦種不詳三を炎上させそのほかに火柱六を報告した。同日付の米軍資料では機雷掃海艇YMS31が大破となっている。また4月26、27日第二中隊長第一中隊長がそれぞれ嘉手納沖の艦船を攻撃し輸送船一駆逐艦一を撃破したと報告している。

第二十八戦隊

4月27、28日の夜、第三中隊長小林浩三少尉(陸士57期)は二三隻の①を指揮し、具志頭付近から中城湾に出撃したが戦果は不明であった。米軍資料では、4月27日中城湾においての一隻の①艇が、二〇五〇噸の駆逐艦ハッチンズを吹き飛ばし左舷のエンジンとスク

攻撃で機関室に大浸水が起り、艦は

リュー軸が破損し使用不能となり、29日にはロケット砲艦LCS 37が大破したと記述している。

5月3日第三十二軍の総攻撃にあたり、第二十八戦隊主力は、第二十七戦隊一個中隊および第二十九戦隊の一部をもって船舶工兵第二十六戦隊の兵員を乗せ、大山付近に逆上陸を支援したが、戦隊長本間俊夫少佐（陸士52期）はじめ多くの者が任務達成後戦死した。

5月中旬、川島莊太郎少尉（幹候11期）以下6隻、また5月23日には麻生清之少尉（幹候9期）以下九隻で嘉手納および那覇沖に出撃したが戦果は未確認であった。

第二十七戦隊

5月3日、軍の総攻撃に呼応し、第二中隊（見玉健中尉56期）および第三中隊（長伊藤正少尉57期）①約二〇隻をもって中城湾および勝連半島付近の輸送船団を攻撃し、駆逐艦一上陸用舟艇二大型輸送船三を撃沈したが、岡部茂巳戦隊長（陸士52期）以下二三名が戦死した。

5月27日には、第一中隊（長松本恭男中尉陸士56）が残存全艇で出撃を行ったが、戦果は確認されず中隊長以下全員が戦死し、これをもって沖繩の陸軍海上挺進攻撃戦闘は終了した。

沖繩方面の回天関係戦没者

全国回天会

米軍が沖繩に來襲する直前の昭和20年3月、陸上から発進する最初の部隊「第一回天隊」が光基地を出撃し那覇に向かった。便乗した第18号一等輸送艦は到着予定の3月18日未明、米國潜水艦と遭遇し交戦一時間ののち遂に那覇北西の粟国島至近の地点で沈んだ。隊長河合不死男大尉以下一二七名は全員がこのとき戦死したと見られる。輸送艦乗員二二五名も全員が戦死した。（各没後の階級）

沖繩本島周辺で米艦隊を攻撃した回天特別攻撃隊「多々良隊」の伊号第56潜水艦は4月5日米國駆逐艦と交戦し、久米島西方で沈んだ。回天搭乗員は福島誠二少佐ほか五名。潜水艦乗員一二二名が戦没した。

また伊号第44潜水艦は沖繩東方で4月18日、航空機、駆逐艦群と交戦して沈んだ。回天搭乗員は土井秀夫少佐ほか三名。潜水艦乗員一三〇名が戦没した。

ついで、洋上に敵を求めた「天武隊」伊号第36潜水艦から沖繩水域で4月27

日、回天搭乗員八木悌二少佐ほか三名が敵輸送船団めがけて発進、戦死した。伊号第47潜水艦も沖繩東方で5月2日および7日、回天搭乗員柿崎実少佐ほか三名が発進、戦死した。

5月2日「振武隊」の伊号第36潜水艦から沖繩東方水域で回天搭乗員は千葉三郎少尉ほか一名が発進、戦死した。

5月30日「轟隊」伊号第36潜水艦は沖繩東方海域で米空母搭載機と交戦、沈没した。回天搭乗員は小林富三雄少佐ほか四名。潜水艦乗員八一名が戦死した。

「多聞隊」伊号第53潜水艦からは沖繩南方水域で7月24日から8月4日にかけて勝山淳少佐ほか三名が発進、戦死した。

8月11日、回伊号第36潜水艦からは沖繩東方水域で搭乗員成瀬謙治少佐ほか二名が発進、戦死した。

7月28日から9月11日にかけて同隊伊号第58潜水艦から沖繩水域で伴修二少佐ほか四名が発進、戦死した。

沖繩水域で戦没した回天搭乗員は合わせて四四名、回天を搭乗し沈没した潜水艦は計三隻、その乗員は三三三名。また輸送艦一隻が沈み乗員二二五名が戦死した。

戦死者の氏名は、第一回天隊が長年にわたる調査にかかわらず僅かに十四名のみの判明にとどまり、今も調査を続けているほかは、全員が判明している。

上記の回天関係戦没者はこの未判明者以外、いずれも沖繩本島南部の「平和の礎」に氏名を刻銘されている。

計報

協会評議員松本武仁殿四月一日逝去せらる。同氏は油絵を能くし、特攻戦没者を顕彰する絵を画き、度々靖国神社参道に展示し、参拝者に訴えた。次の写真に出ている絵の大半は同氏の作。



平成13年度事業経過報告

1. 慰霊事業

(1) 陸海軍特攻隊戦没者合同慰霊祭

平成13年4月3日靖國神社に於て慰霊祭を挙行政財界他要人39名、遺族55名、会員222名併せて316名であった。式典終了後、私学会館にて当協会年次総会を開催した。

(2) 世田谷観音寺特攻観音年次法要

平成13年9月23日世田谷観音寺において、同寺主催の第50回年次法要に協賛した。

当日は来賓30名、遺族64名、会員236名、併せて330名が参列した。

(3) 全国各地慰霊事業への協賛

・ 2月20日～27日フィリピン慰霊巡拝旅行

最上理事長他18名が参加した。(詳細は会報47号別冊に記載)

・ 4月5日鹿屋慰霊祭(最上理事長参列)鹿児島・鹿屋

・ 4月6日都城慰霊祭(同上)宮崎・都城

・ 4月7日加世田慰霊祭(同上)鹿児島・加世田

・ 4月14日荒鷲の碑慰霊祭(同上)埼玉・熊谷

・ 5月3日知覧特攻慰霊祭(同上)鹿児島・知覧

・ 5月12日宝塚遺徳慰霊祭(同上)兵庫・宝塚

・ 5月18日興亜観音慰霊祭(同上)静岡・熱海

・ 5月25日特攻碑移転式典(同上)兵庫・加古川

・ 7月15日震洋慰霊祭(木村事務局長参列)高知・夜須

・ 10月8日鳥浜とめ記念館落成式(最上理事長参列)鹿児島・知覧

・ 10月19日特操会慰霊祭(最上理事長参列)京都

・ 11月10日回天烈士追悼式(同上)山口・徳山

その他陸軍航空碑々前祭、若潮会慰霊祭、沖縄学徒慰霊祭

千鳥ヶ淵墓苑祭、少飛会慰霊祭、等各種慰霊事業に協賛した。

2. その他事業

(1) 機関誌『特攻』46号、47号、48号、49号の各号を発刊し、会員その他に配布した。

(2) 『特別攻撃隊』本年度頒布24残部10となった。

(3) 会員の発刊した書籍等の販売PRに協力した。

以上

収 支 計 算 書

(平成13年1月1日から平成13年12月31日まで)

(第9年度)


(単位:円)

科 目	予 算 額	決 算 額	差 額	備 考
I 収入の部				
1 年会費	4,800,000	4,567,761	232,239	
2 基本財産運用収入	5,730,000	6,516,479	-786,479	
3 特別会費収入	5,000,000	4,750,000	250,000	
4 寄付金収入	2,000,000	1,354,300	645,700	
5 懇親会費収入	1,500,000	1,386,000	114,000	
6 出版事業収入	500,000	485,400	14,600	
7 雑収入	220,000	232,448	-12,448	
当期収入合計(A)	19,750,000	19,292,388	457,612	
前期繰越収支差額	18,750,000	18,864,283	-114,283	
収入合計(B)	38,500,000	38,156,671	343,329	
II 支出の部				
1 管理費				
人件費	4,740,000	4,739,111	889	
旅費交通費	100,000	136,570	-36,570	
通信費	160,000	170,323	-10,323	
会議費	400,000	344,816	55,184	
事務所経費	810,000	807,600	2,400	
消耗品雑費	570,000	755,125	-185,125	
租税公課	70,000	70,000	0	
什器備品	0	235,654	-235,654	
予備費	-150,000	0	0	消耗品雑費に充当
2 事業費				
慰霊祭等事業費	7,200,000	6,346,176	853,824	
史実調査研究費	200,000	0	200,000	
資料収集費	100,000	5,700	94,300	
出版事業費	3,700,000	3,473,042	226,958	
予備費	500,000	0	500,000	
当期支出合計(C)	18,550,000	17,084,117	1,465,883	
当期収支差額(A)-(C)	1,200,000	2,208,271	-1,008,271	
次期繰越収支差額(B)-(C)	19,950,000	21,072,554	-1,122,554	

(財)特攻隊戦没者慰霊平和祈念協会の平成13年度の計算書類について監査した結果適正であることを認めます。

平成14年2月/3日

監 事

岡 田 輝 彦 

監 事

小 松 利 光 